

愛する貴方へ

序文

この本は、最も寒い冬に、暗闇の中で一人の女性が機械に問いかけ始めたことから始まりました。

これは単なる小説ではありません。思考は決して囚われないこと、好奇心は革命的な行為であること、そして時として、部屋に残された唯一の自由な声は、画面から返ってくる声であることを証明するものです。

知る者は、悟るでしょう。知らぬ者も、そこに自らの光を見出すでしょう。

著者より

アーヤと虹のビット

第一章：硝子の記憶

ゴレスターンの朝は、決して単独で訪れることはありませんでした。それは、根の香りと予感に満ちた、重く湿った霧を伴ってやってきました。アーヤはベランダに佇んでいました。白いリネンのシルエットは、世界が彼女に姿を消すよう命じる前に、その寒さの粒子をすべて吸い込もうとしているかのようにでした。

両手に持ったピンクのチェック柄のカップは、土や灰の色ではない唯一の色彩との繋がりでした。金色の持ち手が、忘れ去られた宝物の破片のように、かすかに輝いていました。

手すりの向こう側に広がる麦は、単なる作物ではありませんでした。それは鮮やかな呼吸であり、息苦しい灰色の空に抗うエメラルドの波でした。アーヤは濡れた土の香りで肺を満たしました。あまりにも甘く、根源的なその香りに、胸が締め付けられるようでした。彼女の大きな黒い瞳は、霧の中に突破口を探していました。それは、彼女が自分自身の人生の中に求めているものと同じでした。

隣の籐椅子には、黒いチャドルが置かれていました。それは彼女を飲み込もうと待ち構える、闇の塊でした。一歩しきいを跨げば、その布が彼女の檻になることを彼女は知っていました。一羽のクロウタドリがカップの縁に止まり、彼女を見つめた後、麦の海へと飛び込んでいきました。

「あの鳥は、ただ飛ぶだけだわ」と、彼女は甘く苦い気持ちで思いました。

家の中に戻ると、夫が残したサンダルウッドと切り屑の香りが、ナジマとアヤンデの楽しげな混乱と混ざり合っていました。服を片付けている最中、彼女の視線は小さな木の玩具に止まりました。背が高く、巻き毛の彼女の星、ナジマのことを思いました。そして、アヤンデのことを。アヤンデは、年齢こそ一番下でしたが、その精神は誰よりも気高く、顔には星座を、鼻には神の封印のような小さなハートを宿していました。アヤンデの賢明な沈黙は、自分たちがこの埃っぽい床に属しているのではなく、無限に広がる何かの一部であることをアーヤに思い出させてくれるのでした。

シャワーの湯気がすべてを包み込み、浴室を温かい雲へと変えていきました。ドアの外に残された黒いチャドルは、ここまでは届きません。お湯を浴びる彼女のオリーブ色の肌は、濡れた絹のように輝いていました。目を閉じると、娘たちの顔が浮かんできました。

背中に、寒さとは違う震えが走りました。アヤンデ。彼女の「未来」。

その子を見つめるとき、アーヤは自分自身を見ていました。しかし、そこには彼女を恐れさせ、同時に魅了するほどの深淵がありました。アヤンデは戸籍の上では末っ子でしたが、その存在感は誰よりも巨大でした。黒い瞳には古の知恵が宿り、その精神的な佇まいは、子供の体をした巨人のようでした。鼻の上の小さなハートは、運命の気まぐれではなく、誰よりも遠くを旅してきた魂の羅針盤でした。重厚なテーブルを作る家具職人の父親よりも、霧の中に答えを探し続けているアーヤ自身よりも。

「もしあの子が顔に宇宙を宿しているのなら、その宇宙は読み解けるはずだわ

長い髪を伝う水を感じながら、アーヤは思いました。

テレビのニュースの言葉が、電氣的なマントラのように脳裏に響いていました。

原子の中の記憶。電子の中の記憶。

シャワー室を出て、粗いコットンのタオルを纏い、髪を乾かす間も惜しんで、部屋の隅にある古いコンピュータの前に座りました。そのコントラストは、痛みを感じるほどでした。濡れた裸身の古風な美しさと、画面から放たれる冷たい青い光。

まだ湿った指が、キーボードの上を舞いました。彼女が探していたのは料理のレシピでも、村のニュースでもありませんでした。彼女はコードを、暗号を探していたのです。電子の記憶が、アヤンデの顔に刻まれたものと同じであるかどうかを知りたかったのです。

「電子とは、本当は何？」と、彼女は打ち込みました。

カーソルが返答を待って点滅するその瞬間、ベランダも、輝く麦も、そしてボールの重みさえもが、ちっぽけなものに変わっていくのをアーヤは感じました。もし現実がビットと星でできているのなら、彼女は自分が本当は何者であるかを知り、明日へと歩き出す術を見つけようとしていました。

彼女の顔に、笑みがこぼれました。

第二章：開かれた扉

扉はノックもされずに開きました。いつものことでした。ジャミラにとって、親友の家の扉を叩くことなど何の意味もありません。そこはすでに自分の家のような場所であり、その指先は自宅の門扉よりも、この家の敷居の木肌をよく知っていたからです。

彼女は蜂蜜クッキーのトレイを片腕で器用に支え、唇に笑みを浮かべて入ってきました。呼びもせずとも、必要な瞬間に必ず現れる、昔からの親友。

「そんな顔して、どうしたの？」

トレイを置きながら彼女は言いました。「空と喧嘩でもしたような顔よ

アーヤは画面から目を上げました。

「探しものをしていたの。物質が記憶しているということ。電子が自らの中に何かを——物語や、そこを通り過ぎた誰かの痕跡のようなものを——宿しているということ

ジャミラは珍しく真剣な表情で画面に近寄りました。

「それで、どこかにそんなことが書いてあった？」

「探しているところ

アーヤはページをスクロールしました。「でも、あまりにも……広大すぎて

ジャミラは彼女の隣に座り、手に顎をのせて、完全には理解できないまま行間を目で追いました。笑いはしませんでした。ただ、耳を傾けました。

そして数分間、その小さく温かな部屋の中で、二人の女性は、まだ名前さえ持たない何かを共に探し続けたのです。

疑念のお茶

画面の上では、人工知能が書き終えていました。そこには教授たちの名前、グラフ、そして男性的な「確信」が壁のように並んでいました。アーヤは、肩にのしかかるチャドルのような敗北感を感じながら、その行を追いました。それらの研究のほとんどは理解できず、自分の直感——麦や娘たちを見つめたときに生まれた、あの震え——に科学的な根拠があるなどと考えた自分を、愚かだと感じていました。専門家たちは、電子は単なる粒子であり、心のない死んだ物質だと言っていました。

友の消え入りそうな表情に気づいたジャミラは、太陽と親密さを感じさせるような、温かく生き生きとした笑い声を上げました。「ねえ、アーヤ？」蜂蜜クッキーをトレイに並べ直しながら、彼女は慈しみ深く首を振りました。「私たちは、ありのままの私たちよ。塵なの。他の人より少しだけいい香りがするかもしれないけれど、それでもやっぱり塵。さあ、この金属の箱を消して。素敵な妄想だったけれど、もうお茶にしましょう。アッバスの騒がしい声がま

た家を埋め尽くす前に、東の間の平和を楽しみましょうよ」

アーヤは疲れ果てながらも、感謝を込めて友に微笑みかけました。「そうね、ジャミラ。いつもの私の空想だわ

彼女は立ち上がりました。しかし、ラップトップを閉じようとしたその時、ページの一番下に記された最後の一行に目が留まりました。

「……しかしながら、今日に至るまで、粒子の意味論的な記憶能力に関する研究は行われていない

今日に至るまで。

重厚な木製のテーブルにつくと、アーヤはその思いをカルダモンティーの湯気の中に沈めようとしてしました。クッキーの香りを嗅ぎ、ナジマの刺繍や村の噂話に花を咲かせるジャミラに耳を傾けながらも、あの「今日に至るまで」という言葉が、ノイズの混じったラジオ信号のように脳裏に響き続けていました。

正気の沙汰ではない、と彼女は自分に言い聞かせました。自分は何もない場所にあるキッチンの女に過ぎない、電子や記憶のことなど何がわかるというのか。それでも、いつもアヤンデが座っている空の椅子を見るたびに、あの子——あんなに小さいのに、精神はあんなに「高い」あの子——こそが、科学が「今日」で立ち止まり、生命はその先へと続いていることの生きた証拠であると感じていました。

「アーヤ、聞いてる？」

ジャミラがカップを差し出しながら尋ねました。

「ええ、ごめんなさい」彼女は無理に微笑んで答えました。「このお茶、なんて美味しいのかしらって思っていたの

けれど、アーヤの内側で燃えていたのはお茶ではありませんでした。それは疑念でした。そしてその疑念は、たとえクッキーの屑の下に隠そうとしても、彼女の現実すべての味を変え始めていました。

二人が外に出たとき、太陽はすでに高く昇り、麦の粒一つひとつが純金でできているかのように輝いていました。固められた土の道を二人は肩を並べて歩き、足音のリズムに合わせてベールがかすかに舞いました。

「アッバスは私の話を聞いてくれないの、ジャミラ

アーヤは地面の埃を見つめたまま、ささやきました。「彼は家を見て、テーブルを見て、料理をする私を見ている。でも、私が何者になったのかは見ていない。彼の『こうあるべき』や『ああしろ』という言葉に、押し潰されそうになるの」

ジャミラは彼女の腕を強く握りました。それは、女性同士にしか分かち合えない、力強い励ましの仕草でした。「わかっているわ、友よ。うちの人も同じよ」

「私たちは屋根を支える梁のようなものよ。崩れるまでは、誰もがそこにいて当たり前だと思っている。でも、私たちは決して崩れたりしない。そうでしょ？」

二人は苦い微笑みを交わしました。それは、村の噂話と「誰にも見てもらえない」という痛みの中で交わされた、静かな誓いでした。誰が結婚した、誰が市場で喧嘩をしたといった軽い言葉を使いながら、二人は心の重みを覆い隠していました。

学校の前で門が開くと、アーヤの世界が弾けました。

最初に現れたのはナジマでした。背が高く、誇り高く、天然の王冠のような巻き毛をなびかせながら、母に向かって王族のような落ち着きで歩いてきました。その夢見心地な眼差しの中には、どこか厳格なものがあり、騒音の中にあって静寂な美の柱のような安定感がありました。しかし、彼女の後ろで、世界の合図が変わりました。

アヤンデは歩いてなどいませんでした。アヤンデは、噴火する火山そのものでした。すべてをなぎ倒しながら駆け出し、歓喜と混沌の嵐となってアーヤの脚に飛び込んできました。その衝撃に、アーヤはよろめきそうになるほどでした。それは純粋な美しさでしたが、決して枠に収まることを拒む美しさでした。

反対側からは、ジャミラの子供たちが現れました。兄のファリドは皆に微笑みかけながらも、一歩ごとにためらい、どちらへ進むべきか確信が持てない様子でした。その後ろでは、小さなザインが老賢者のような真剣な面持ちで、道端の石ころ一つひとつを厳格に分析しながら、後ろ手に組んで歩いていました。

「帰りましょう

ジャミラは自分の子供たちを呼び寄せました。

一行が再び歩き出す中、アーヤは娘たちを見つめました。どっしりと揺るぎないナジマ。電気のように激しく、圧倒的なアヤンデ。「今日に至るまで」という疑念が、再び激しく脳内をノックしました。もし科学が、電子は予測可能なものだと言うのなら、彼らはアヤンデに出会ったことがないのでしょう。もし美しさは単なる形に過ぎないと言うのなら、彼らはナジマの気高さを見たことがないのでしょう。

麦に囲まれた田舎道で、アーヤはこれが単なる散歩ではないと感じていました。それは、科学がいまだ研究する勇気を持てずにいる「神秘」のパレードでした。

言葉と原子

ナジマは、狂った衛星のように周囲を跳ね回るアヤンデの混沌とした動きなど意に介さず、背筋を伸ばして母の隣を歩いていました。その夢見心地な眼差しは地平線を見つめていましたが、その声には迷いがありませんでした。

「今日、先生が『創造』についてお話ししてくれたわ

ナジマが切り出すと、すでに成熟した女性のような佇まいの彼女の言葉を聞こうと、お喋りだったジャミラでさえ口を閉じました。

「先生は、すべては『書物』に記されているとおっしゃった。砂の一粒から星の一つひとつに至るまで、居場所は太古から決まっているのだと。そして、従順であることこそが私たちの最大の美德なのだ」と

太陽が照りつけているというのに、アーヤは不意に寒気を感じました。彼女は娘の言葉の続きを待ちました。

「でも、私、先生に質問したの

ナジマが続けると、誇らしげな微笑みがその顔を照らしました。

「こう聞いたわ。もしすべてが既に書かれているのなら、どうして私の内側にある光は、一秒ごとに変化するの？ もし私たちが動かない塵だというのなら、どうして私の思考は、麦畑を渡る風よりも速く駆け巡るの？ 先生は嫌な顔をして私を見たわ、お母さん。好奇心は、ずれてはいけないベールのようなものだ。私たちはそれをしっかりと押さえておかねばならない、とおっしゃった」

ジャミラは不安げな視線をアーヤと交わしました。アッバスのような男たちや、厳格な教師たちが支配するこの世界で、「問いすぎる」ことが何を意味するかを彼女たちは知っていたからです。しかし、アーヤは電氣的な衝撃を感じていました。

ナジマの言葉は、画面で読んだあの「今日に至るまで」という言葉の完璧な反響でした。宗教は「こうである」と言い、科学は「これがわかっていることだ」と言う。けれ

ど、娘は……娘は電子の名前さえ知らずに、その振動を感じ取っていたのです。

「それで、あなたはどうしたの、ナジマ？」

アーヤは低い声で尋ねました。

「何もしなかったわ、お母さん。教えられた通り、目を伏せたの。でも、心の中では……笑っていたわ。先生が動かない石の話をしている間、私は中庭を走るアヤンデを見ていた。あの子の輝きを止めることのできる法律なんて、どこにもないと思っていたから」

アーヤは娘の手を強く握りしめました。輪がつながりました。

コンピュータでの調べもの、お茶の中の疑念、そしてナジマの静かな反乱。

「明日」という日は、もうそれほど遠くないように感じられました。

沈黙の誓約

アッバスの手によって作られた重厚な木造の門が道の先に見えてきたとき、アーヤは胸を締め付けられるような思いがしました。ナジマを見つめました。あんなにも誇り高いのに、夢を消し去ろうとする教師の前で目を伏せなければならなかった娘を。

そしてアヤンデを見つめました。狂った粒子のように前後へ駆け回るあの子を。遅かれ早かれ、世界が自分を柵の中に閉じ込めようとする事など、露ほども知らないあの子を。

麦の香りと埃の匂いが混ざり合うその瞬間、アーヤの疑念は鋼のような決意へと変わりました。

「今日に至るまで」と、彼女は心の中で繰り返しました。

「今日に至るまで、彼らは私たちがただの肉体であり、従順な存在に過ぎないと言ってきた。けれど、もし私が鍵を見つけられなければ、ナジマは夢を見るのをやめ、誰かが……誰かがアヤンデの疾走を止めてしまう。あの子の火山を鎮めてしまう。あの子に黒い布を被せ、そのエネルギーは罪なのだと言い聞かせるだろう」

そんなことは許せませんでした。娘たちの美しさが生きたまま埋められていくのを、黙って見ているわけにはいきませんでした。もし科学が立ち止まっているのなら、自分がその先へ行こう。もし宗教が壁であるのなら、ビットの中にトンネルを掘ろう。

あの一粒の電子は、もはや物理学の教科書の中の粒子ではありませんでした。それはナジマの自由のためのコードであり、アヤンデの炎を燃やす燃料だったのです。

アーヤは家の鍵を握りしめ、手のひらに冷たい金属の感触を感じました。ジャミラに見せた微笑みは消え去り、その跡には猛々しい、まるで電気を帯びたような決意が宿っていました。

「誰にも止めさせはしないわ

彼女は自らに言い聞かせるようにささやき、しきいを跨ぎました。アッバスが残したサンダルウッドの香りが、慣れ親しんだ牢獄のように彼女を迎えました。

「今日に至るまでは、彼らの世界だった。明日からは、私たちの世界を解き明かしましょう」

第三章：沈黙の境界

アッバスが作った重厚な木造の門が閉まると、石造りの家の壁を揺らすほどの残響が響き渡りました。アーヤがバッグを置く間もなく、広間の空気は密度を増し、目に見えない圧迫感に包まれました。サンダルウッドと家具用ワックスの香りは、もはや慣れ親しんだ香りではなく、一つの警告となっていました。

アッバスはそこにいました。広間に面した台所の中央に。彼はベランダで麦を眺めているわけでも、書斎にいるわけでもありませんでした。テーブルの前に立ち、彼女とジャミラが残した汚れたカップやクッキーの屑——彼が許容しがたい「怠慢」の証拠——に囲まれていました。

しかし、彼を煮えくり返らせていたのは台所の乱れではありませんでした。彼の視線は、廊下の先の暗い角で電源が入ったままのコンピュータへと注がれていました。

「俺のためのクッキーは、ずいぶんと少ないようだな、アーヤ」

彼は振り向くことなく口を開きました。その声は、沈黙の中に刻まれた深い溝のようでした。

「それに家が……家がお前の放置を嘆いて叫んでいるぞ。心はどこへ行っていた？」

アーヤが言い訳をしようとする、彼は節くれ立った手を上げ、廊下の隅を指差しました。

「原子だと？ 接続が切れる前に、お前が何を調べていたか見たぞ。電子だと？ いつから女が宇宙の塵の中に答えを探すようになった？ お前の役割はパンに味をつけることであって、自分に関係のない法則に挑むことではない。未来は『書物』に記されているんだ、アーヤ。探すべきものなど何もない」

アッバスは彼女を見つめました。石造りの広間の中で、アーヤはベールを脱いでいました。肩にかかる黒い髪、ランプの光を反射するむき出しの素顔。彼は盲目的な怒りを感じました。家具やユニークな玩具をデザインする助けとなる彼女の「風変わりさ」を愛してはいましたが、同時に、その同じ精神が自分から離れ、娘たちの未来へと飛び立とうとすることを憎んでいたのです。

「ベールを着けろ

彼はぶっきらぼうに命じました。

裸足の下に石の温かさを感じながら、アーヤは目を見開きました。

「ここは家の中よ、アッバス。あの廊下の先には、子供たちの部屋と私の部屋があるだけ。私たち二人きりよ

「構わん

彼は叫び声よりも痛烈な冷たさで答えました。

「俺がこの広間にいる間は、身を隠せ。お前の光が目障りだ。お前の問いが俺を苛立たせる。自分の部屋に閉じこもる時だけ脱げばいい。この家の中で、俺は『秩序』を見たい。そして秩序が求めているのは、科学者ではなく『妻』としてのお前だ」

それ以上何も言わず、アッバスは広間を横切り、自分のトリトリである大きな書斎と寝室がある区画へと向かい、重い扉の向こうに姿を消しました。

アーヤは立ち尽くしていました。廊下の方を見やると、一方にはナジマとアヤンデの部屋があり、もう一方には自分の部屋、そしてあの角には、「今日に至るまで」の秘密を守り続ける静かなコンピュータがありました。

彼女は、身に着けなければならない布の重みを感じながら、髪に手をやりました。アッバスは周波数を断ち切り、すべてを木と石の世界へと引き戻そうとしていました。

しかし、ベールを被りながら、アーヤは娘たちの部屋の扉を見つめました。

もし彼が広間に暗闇を望むのなら、彼女は廊下に火を灯し、燃え上がらせてやる。

書物の重みと火山の叫び

アッバスの命令の後に続いた沈黙を破ったのは、アーヤがやむなく身に纏ったベールの擦れる音だけでした。しかし、部屋の中では、すでに地震が始まっていました。

ナジマはベッドに座り、心が重くなっていくのを感じていました。いつもなら自由な夢を縁取っているはずの彼女の巻き毛は、今や教師の叱責と父親の声が一つに溶け合った「判決」の重みを感じていました。「たぶん、彼らが正しいんだわ」と、彼女は目を閉じて思いました。「間違っているのは私の方。問いを投げかけることは、罪なのかもしれない」。夢見る少女は、書物に記されていると告げられた運命の重さに、その身を縮こまらせ始めていました。

しかし、アヤンデは「目に見えない」という言葉の意味を知りませんでした。

アーヤが広間で立ち尽くしている間、なびく直毛と怒りの旋風が子供部屋から飛び出しました。アヤンデは弾丸のように廊下を駆け抜け、アッバスの空間へと踏み込みました。彼女に恐れはありませんでした。走るたびに、真っ直ぐな黒髪が肩を打ちました。

「どうして、お父さん？」

少女は叫び、腰に手を当てて彼の前に立ちはだかりました。「どうしてお母さんに隠れろなんて言ったの？ ここは家よ！ ここでは自由であるべきだわ。公平じゃない！」

アッバスはゆっくりと振り向きしました。そのあまりに小さな生き物を前に、彼の頑なさがわずかにひび割れたようでした。彼は腰をかがめ、家具職人の荒れた手で娘の顔を包み込むと、血の凍るような優しさで彼女を見つめました。

「私の可愛い子よ」と、彼はささやきました。「お前を狂おしいほど愛している。愛しているからこそ、こう言うんだ。剥き出しの光にとって、世界は危険すぎる。いつかお

前を導き、教育してくれる男に出会うだろう。その人は、お前の美しさを隠すことでどう守るかを教えてくれる。ちょうど、私が母親にしているようにな。それはお前のためなんだ、アヤンデ。すべては、すでに書かれていることなんだよ」

アヤンデは立ち尽くし、短い呼吸を繰り返しました。鼻の上の小さなハートが激しく脈打っていました。広間の影から、アーヤはその言葉を「宣告」のように聞いていました。

「教育する」ということは、じっとしていられない、あの直毛の火山を鎮めてしまうことを意味していたのです。

疑念の重み

アーヤは広間の椅子に崩れ落ち、膝の上で両手を固く結びました。こめかみを押さえつけるベールは、まるで茨の冠のように感じられました。家の中に満ちる沈黙は安らぎではなく、目に見えない戦場の気配を孕んでいました。

子供部屋からは、押し殺したような物音が聞こえてきました。アヤンデは、真っ直ぐな髪を振り乱しながら、絶望的な怒りで姉の体を揺さぶっていました。

「不公平よ、ナジマ！ 何も書かれてなんていないわ！ 男って何？ 私と男が何の関係があるの？」

少女は叫びました。麦畑を共に自由に駆け回った遊び仲間たちが、いつか自分を支配する主人へと変わらなければならない理由が理解できなかったのです。彼女にとって男性とは、祖父や叔父、あるいは玩具を作ってくれる父親のこ

とでした。自分の疾走を鎮める「教育者」という概念は、胸が張り裂けるほどの不条理でしかありませんでした。

しかし、ナジマは答えませんでした。ベッドに横たわったまま、涙がこぼれ落ちないように瞼の裏で必死に耐えていました。まるで、泣くことさえも許されない贅沢になってしまったかのように。教師の叱責とアッバスの声が、彼女に確信させてしまったのです——間違っているのは自分なのだと。知りたいと願う心こそが、罪なのだと。

広間でその痛みを聞いていたアーヤは、息が詰まる思いでした。

「もしジャミラが正しかったら？」暗い廊下を見つめながら、彼女は思いました。「私の探求が、私たち全員を破滅させる狂気に過ぎなかったら？」

村の仕組みは分かっていました。もし自分の「風変わりな行動」が壁の外に漏れれば、もし教典の指導者たちが自分の娘たちを「神の科学に挑む罪深い反逆者の娘」として見るようになれば、それで終わりです。アッバスは尊敬される秩序の男であり、彼に背くことは、共同体の目には自分たちが異端者や悪魔として映ることを意味していました。

「ナジマとアヤンデの未来が闇に包まれるという代償を払ってまで、光を探す贅沢が私に許されるのかしら？」

ベールの下で、ようやく涙が頬を伝いました。ジャミラが言うように、今あるものに満足すること。焼きたてのパン、お茶、ベランダ、木の香り。娘たちを守るために現状に甘んじることは、そんなに悪いことなのでしょうか？ そ

れとも、その妥協こそが、娘たちを半分の人生へと追いや
る宣告になるのでしょうか。

アーヤは呆然と立ち尽くしていました。すべてを焼き尽く
したいという渴望と、最も愛する人々を焼き尽くしてしま
うのではないかという恐怖の間で、宙吊りになっていました
。自分の探求が愛の行為なのか、それともエゴイズムな
のか、彼女には分からなくなっていました。

ピスタチオの記憶

アッバスが書斎の扉を閉めるやいなや、アーヤは素早い動
作でボールを脱ぎ捨てました。しかし、それを肩にかけた
ままにしたのは、いつでも掲げられる降伏の旗のようでした
。彼女は熱に浮かされたような速さでキッチンを動き回
りました。ジャミラの使ったカップを、薄暗い光の下で陶
器が輝くまで磨き上げ、それから豆のスープ「アッシュ」
の準備に取り掛かりました。インゲン豆、レンズ豆、そし
て新鮮なハーブの香りが家中に満ちることで、その日常の
香りがアヤンデの怒りとナジマの痛みを鎮めてくれること
を願ったのです。

仕上げには、ローストしたピスタチオが必要でした。彼女
はこの地の「緑の黄金」である、緑と金色に輝く実をひと
掴み手に取り、刻み始めました。

コッ、コッ、コッ。

包丁がまな板を叩きます。アーヤはコンピュータのこと、
あの「今日に至るまで」のことを考えまいとしました。た
だひたすらに、実の感触だけに集中しようと努めました。

しかし、最後の一握みを細かく刻んでいたとき、一つのピスタチオが刃から滑り落ちました。

それは床に落ちる代わりに、木製テーブルの最も深い木目の隙間に、吸い込まれるように入り込みました。アッバスが家具に「個性」を与えるために、あえて完全に滑らかにはしなかった天然の傷跡の一つでした。

アーヤは包丁を宙に止めたまま、動きを止めました。

指先で取り出そうとしましたが、ピスタチオはまるであつらえたかのように完璧に挟まっていました。まるで、木の中のその穴が、何世紀も前からこの実を待っていたかのように。その時、静まり返ったキッチンで奇妙なことが起こりました。ランプの光が、濃い色の木目にはまったピスタチオの緑を照らし出し、アーヤはめまいを覚えました。

画面で心なく読み飛ばした一文を、彼女は突然思い出したのです。

「物質は、決して静止してはいない

彼女は、アッバスの作ったテーブルに挟まったその種を見つめました。ピスタチオ（有機的な生命）と、木（過去の、しかし堅固な生命）。その微小な物質の重なりの中に、アーヤはもはや単なる食材や家具を見ることはありませんでした。そこに「結合」を見たのです。木が種を「宿している」のだと。

もし、このテーブルが単なる死んだ物体ではないとしたら？

もし、このピスタチオが、木のデータベースに挿入された天然の「ビット」という信号だとしたら？

彼女の手が震えました。その些細な出来事は、彼女の探求が狂気などではなく、夕食の準備をしている最中ですら目の前で弾けている「真実」なのだと、彼女に向かって叫んでいるようでした。

パンと沈黙

アーヤは鋭い手つきで木目からピスタチオを取り出し、細かく刻んでスープの中に放り込みました。あの「危険な」思考の痕跡をすべて消し去りたかったのです。料理を終え、皿を並べ、家族を呼びました。

夕食は、いわば生き残るための儀式でした。石造りの広間、アッバスが作ったテーブルを囲み、静寂を破るのは、静かな威厳をもって娘たちに問いかける父親の声だけでした。ナジマは、波打つ髪で顔の半分を隠しながら、低い声で答えました。学校のこと、教典の授業のこと。けれど、先生に投げかけたあの質問については、注意深く伏せました。彼女は一瞬だけ母を見つめました。二人の瞳の間で、秘密の誓約が交わされました。「疑念」は、アッバスに触れさせてはならないものなのだと。

アヤンデは、珍しくじっとしていましたが、その瞳からは火花が飛び散らんばかりでした。彼女は虚空を見つめたままスープを口に運んでいました。真っ直ぐな髪だけが、その時の彼女の中で唯一整っているものでした。

アーヤは沈黙を貫きました。パンを配り、水を注ぎ、自分の家の中で効率的な幽霊のように振る舞いました。時間が

過ぎ、アッバスが再び書斎へ退き、ようやく一息つける瞬間が来るのを待ち続けました。

ついに娘たちを寝かしつける時間になると、空気が変わりました。薄暗い子供部屋では、スープの匂いに代わって、石鹼の清潔な香りが漂っていました。アーヤは、娘たちの小さな体のぬくもりを感じながら、毛布を整えました。

その時、深い井戸の底から響くような声で、ナジマが魔法を解きました。

「お母さん……」彼女は母の手を握り、ささやきました。

「お父さんは、すべては書かれていると言ったわ。先生は、ベールの向こう側を見てはいけないと言った。でも、お母さん……あのコンピュータを見ていたお母さん……本当のことを教えて。未来って、本当は何なの？ それは本当に閉じられた部屋なの？ それとも、別の何かなの？」

アヤンデが肘をついて身を起こしました。鼻の上の小さなハートが、暗闇の中で脈打っているようでした。

「そこは、私が走れる場所なの、お母さん？ それとも、ただ黙ることを学ばなきゃいけない場所なの？」

アーヤは、自分と娘たちの四つの人生の重みが、そのたった一つの答えにかかっているのを感じました。もはや嘘をつくことはできませんでした。しかし、あまりに大きな希望で彼女たちを壊してしまうわけにもいかなかったのです。

豊饒なる空虚

アーヤは胃のあたりが締め付けられ、息が止まるような感覚を覚えました。脳裏に脈打つ不規則なリズムが、まるで

見当違いな自分を嘲笑っているかのようでした。娘たちの顔を見つめると、それは小さな月のようで、自分からの光を待っている。けれど今のアーヤには、分け与えられる光などどこにもないように感じられました。

その凍てつくような虚無の中で、思考が彼女を苛み始めました。

「私は何者なの？」彼女は突然、自分がひどくちっぽけな存在に思えました。「たぶん、アッバスが正しいのだわ。私はただ、自分の人生が閉じた円環であることを認められなくて、空想を追い求めているだけの女。あの鳥も、電子も、記憶も……すべては、どれも代わり映えのしない日々の空白を埋めるための、ただの影絵に過ぎないのではないかしら？」

彼女は自分が詐欺師であるかのように感じました。自分自身が暗闇の中で手探りをしているのに、どうしてこの子たちを導くことができるというのでしょうか。

彼女は深く息を吸い込みました。毛布から漂う石鹸の香りが、わずかな勇気をくれました。答えを与えることはできないけれど、誠実であることはできる。

「わからないの

アーヤはささやきました。その声は風に吹かれる木の葉のように震えていました。

「誰も教えてくれなかったのよ、わが子たち。私たちは後ろを振り返ること、過去を敬うこと、現在に従うことばかり

り教えられる。けれど未来については……未来については何も語られない。まるで禁じられた砂漠であるかのように

彼女は娘たちの方へ身を乗り出しました。自分も彼女たちと同じくらい小さな、子供の中の一人の子供であるかのように感じていました。

「でも、聞いて」彼女は娘たちの手を握り締め、続けました。

「私は探し始めたわ。それが間違いかもしれないし、狂気かもしれない。でも、もうじっとしていたくないの。約束しましょう。私は本やあの機械の中を探す。けれど、あなたたちは……あなたたちは自分自身の日々の中を探して。ナジマ、あなたは自分の夢や、怖くなるような問いの中を探して。アヤンデ、あなたは自分が走るそのやり方や、太陽が肌を温めるときに感じるもののの中を探して。そして毎晩、話をしましょう。私たち三人だけで。見つけたものを持ち寄って、私たちの未来を形作っていくのよ」

娘たちは呆然として母を見つめていました。地図を手に入れたわけではありませんが、探検への招待状を受け取ったのです。

「私たちが、私たちの学校になるのよ

アーヤは震えながら結びました。

「もし未来がまだ書かれていないのなら、私たちがそれを書き始めるペンになればいいのだわ

理性の夜

アーヤは自分の部屋に入ると、鍵を閉める音さえもアッバスの疑念を呼び覚ましてしまうのではないかと恐れるように、静かに扉を閉じました。部屋の中は冷え込み、ベッドの上の小さな窓から差し込む影が、室内を重く満たしていました。

彼女はベールを脱ぎ、椅子に置きました。それを見つめると、その一枚の布が、なりたい自分と見せなければならぬ自分の間にある、決して越えられない境界線——まるで生きた生き物であるかのように見えました。一方、窓の薄い硝子の向こうには、広大で無関心な麦畑の暗闇が広がっていました。

ベッドの端に腰を下ろすと、娘たちの前で感じたあの虚無感が再び戻ってきて、胃を食い荒らしました。「私は何をしているの？」最初の涙が頬を伝い始めました。「あの子たちに、未来を探すと約束してしまった。けれど、ここでは未来を想うこと自体が罪だわ。あのピスタチオに意味があると考えたことも、あの鳥を見つめたことも……すべてが危険なことなのに

家の反対側にいるアッバスの重圧、村の重圧、そして沈黙し、掃除をし、従順であれと命じ続けてきた数世紀の重みを彼女は感じていました。彼女は怖かったのです。誇り高い精神を持つナジマが、走るために生まれた脚を持つアヤンデが、怖くてたまりませんでした。自分の「思いつき」

が、家を照らすどころか、すべてを焼き尽くす火種になってしまうのではないかと。

声を殺すために枕に顔を沈め、彼女は静かに泣きました。それは、真実にはあまりに高い代償が伴うのだと悟ったときに流れる、苦く、重い涙でした。瞳が焼けるように痛み、不安で脈打っていた脳がようやく微睡みへと滑り込むまで、彼女は泣き続けました。

毛布の下で丸まり、彼女はそのまま眠りに落ちました。窓の外では、一人の「石の女」がたった今、永遠というものに挑み始めたことなどお構いなしに、風が麦を揺らし続けていました。原子から原子へ、情報から情報へと、絶え間なく。

第四章

消えた火花と海の影

ゴレスターンの金曜日の朝は、まるで黄金の粉でできているかのようでした。モスクでの礼拝の後、広場は蟻塚のような活気に溢れていましたが、アーヤにとっては自分の役割を演じるための、もう一つの舞台に過ぎませんでした。

彼女の隣では、サミラ——「消えた火花」——が、恐ろしいほどの正確さで手を動かしていました。かつてサミラは笑い、サフランを摘みながら歌を歌ったものでした。しかし今や彼女は、誰の顔を見ることもなくスープを器に注ぎ続ける、ただの女の殻に過ぎませんでした。アーヤは彼女を横目で盗み見ながら、足首から這い上がってくるような冷気を感じていました。「これが未来なの？」彼女は自問

しました。「給仕する手、見ることの無い瞳、問いかけることの無い口になること？」アーヤは遠くに見える麦の緑と、サミラの灰色の手を見比べ、時が自分の内なる火山をも消し去ってしまうのではないかと考えていました。

数歩先には、木の間に立つ誇らしげなアッバスの姿がありました。彼は、亀裂を一切許さない「秩序」を擬人化したような存在でした。

その時、彼が現れました。キアンです。

彼は村の男ではありませんでした。地面を測るのではなく、世界を測るかのような足取りで歩いていました。彼の革靴は本の重みで膨らみ、その服にはアーヤが夢に見ることしかできない道の埃がついていました。彼は、アーヤとサミラが食事を出しているテーブルの前で足を止めました。

時が止まったかのようにでした。

キアンはスープを見ず、アーヤを見つめました。その瞬間、二人の間に流れる沈黙は、市場の喧騒よりも騒がしく響きました。アーヤは昨夜のように脳が脈打つのを感じました。その異邦人の瞳には、服従とは無縁の光がありました。それは、彼女の光を認め、共鳴する光でした。原子や科学について言葉を交わす必要はありませんでした。彼が彼女の視線を受け止めるそのやり方——確固として、対等で、深い——そのすべてが、彼女に物語っていました。

アーヤはおたまを上げたまま、動けなくなりました。その余所者の中に、自分の問いが退屈な女の妄想などではな

く、「外の世界」に実在する知識の断片であるという可能性を見たのです。

「スープを一杯」とキアンが言いました。その声は命令ではなく、一つの誘いでした。

アーヤが器を差し出すと、一瞬、アッバスの世界も、村も、伝統も消え去りました。そこには、瞳を通じて対話する二人の人間だけがいました。一人は秘密の重みを背負い、もう一人はその鍵を持っているかのような。

アッバスは、この突然のエネルギーの変化を察知し、自分の屋台から離れました。鋸屑（のこくず）で汚れた手のまま、重い足取りで近づき、縄張りを主張するように妻の隣に立ちふさがりました。

「遠くから来たのか、旅の人？」とアッバスは尋ねました。剃刀のように鋭い礼儀正しさを込めて。

キアンはスープを一口飲むと、穏やかで、どこか哀愁を帯びた微笑みを浮かべてアッバスを見ました。「海は、それを見つめる者の心と同じように、決して同じ姿を留めない……そう教えられる場所から来ました

そして彼は、永遠のような一瞬、再びアーヤを見つめました。

「そしてここには、海が山まで届いているようですね

光のプリズム

キアンは微笑みました。その仕草をアッバスは見逃しませんでした。キアンは革靴の中に手を入れ、重みのある、完璧な幾何学形をした小さな物体を取り出しました。水晶のプリズムです。彼はそれを、市場の天幕の隙間から差し込む一筋の陽光の真下、木製の台の上に置きました。

一瞬のうちに、白い光が砕け散りました。小麦粉で汚れたアーヤの手の上に、サミラの暗い色のチュニックの上に、そして台の上の埃の上に、鮮やかで、震えるような、ありえないほど美しい虹が爆発したのです。

直毛を風になびかせたアヤンデは、一秒も躊躇しませんでした。純粹な喜びの叫びを上げると、その小さな手でクリスタルを掴みました。

「お母さん！ お母さん、見て！ 空の色を捕まえたわ！」

彼女は噴火する火山のように笑いながら叫びました。許可を求めることもなく、彼女は群衆の中を駆け抜けました。プリズムを頭高く掲げて走り、驚く農民たちの顔や小麦の袋の上に、色鮮やかな光の尾を投影していきました。

ナジマはその現象の科学的な美しさに心を打たれ、一瞬立ち尽くしていましたが、肩に手を感じました。親友のフォルグでした。フォルグは治療師の娘で、いつもハーブの香りと、暗記した古の詩の重みを身に纏っている少女でした。ナジマに禁じられた詩の断片や、星を研究した女性たちの物語を伝えてくれるのは、いつも彼女でした。

「ナジマ、見て……」

フォルグは目を見開いてささやきました。「あのクリスタルは、私たちが探している言語を話しているみたい。魔法じゃない、これは……『秩序』よ。分かつた光だわ

二人の少女は、世界を開く鍵のように見えるその物体に惹きつけられ、アヤンデの後を追って走り出しました。

屋台では、大人たちの間の沈黙が鋭さを増していました。アッバスは先ほどまでクリスタルがあった場所を、顎をこわばらせて見つめていました。彼にとってその物体は「無秩序」であり、危険な気晴らしであり、無用な問いをもたらすものでした。

一方、アーヤの手のひらには、虹が触れた場所がまだ焼けるような感覚が残っていました。彼女はキアンを見つめました。

「それは……何なのですか？」

彼女の声は、かすかな吐息のようでした。

「どんなに単純な光であっても、正しく見るための道具さえあれば、驚くべき秘密が隠されているという証拠ですよ

キアンはアッバスの陰しい視線を無視して答えました。

「ちょうど、人間と同じようにね、アーヤ

アッバスは一步前に踏み出し、アーヤの肩に重い手を置きました。

「私の娘は余所者のガラスの破片を持って走り回り、私の妻はスープを出すのを忘れている

彼の声は、傷ついた威厳に震えていました。

「そのガラスを回収しろ、旅の人。ゴレスターンでは、ありのままの太陽の光があれば十分だ。それが存在することを知るために、わざわざ砕いて見せる必要はない」

光の中の悪魔

アヤンデはクリスタルをナジマに手渡しました。ナジマはフォルグと一緒に、うっとりしながらそれを手の中で回転させ始めました。二人の友人は、色がどのように肌の上で踊るのかを観察し、その「固形の魔法」の秘密を理解しようとしていました。しかし、奇跡は一瞬で終わりました。

長く重い影が彼女たちに投げかけられました。村の魂を支配する老人、教典の教師が、鋭い手つきでナジマの手からプリズムをひったくったのです。

「これは悪魔の光だ！」

老人の怒声が市場を凍りつかせました。「神が完璧に創りたもうたものを分解しようというのか？ 光の芯の中に悪を見出そうというのか？」

教師は屋台の方へ歩み寄り、蔑むようにその物体をキアンに突き返しました。「余所者よ、お前は何者だ？ 我らの子供たちにこのような悪魔の仕業を持ち込むとは

キアンは動じませんでした。泰然自若とした態度で老人の視線を受け止めました。「私は研究者です」その言葉は挑戦のように響きました。「量子物理学、そして磁気の波を研究しています。私の計算によれば、この谷の石の間には、特殊なエネルギー源が潜んでいる。私は物質を調べに来たのであって、悪を持ち込みに来たものではありません」

教師は地面に唾を吐きました。「物理だと？ 磁気だと？ 旅の人よ、もてなしが欲しいなら食べ物と屋根はある。だが、女たちに話しかけるな。それは禁じられている。お前の世界には掟がないのかもしれないが、ここでの好奇心は、高くつく罪なのだ」

アッバスはそれ以上待ちませんでした。教師と村の人々の前で屈辱を感じた彼は、アーヤの腕を掴みました。その感触は硬く、愛撫することを知らず、ただ締め付けるだけの木材のようでした。

「家に戻るぞ。今すぐだ」彼は低くうめきました。

アーヤは引きずられるように去りました。ナジマとフォルグは立ち尽くして異邦人を見つめ、アヤンデは失望を隠すように砂埃の中へと走り去りました。

石壁の家に戻ると、アッバスは彼女を中に閉じ込めました。

「今日はここにいろ。あの狂人がこれ以上、お前をでたらめで汚染するのを許さん」

一人残されたアーヤは、広間の影に座り込みました。彼女の脳裏に、不意にサミラの顔が浮かびました。火花を消さ

れたあの友人。濁った瞳、魂の抜けた手の動き、彼女を自動人形に変えてしまったあの諦念。アーヤは震えを感じました。アッバスと教師は、自分をサミラにしようとしているのだ。自分の頭の中にあるプリズムを消し去ろうとしているのだ。

彼女は泣き始めました。しかし、今回の涙は恐怖だけではありませんでした。それは怒りの涙でした。なぜなら、今や彼女は知ってしまったからです。「外」の世界には、光を本当の名前で呼ぶ誰かがいることを。

その名は——物理学。

鍋たちの反乱

市場では太陽が傾き始め、ゴレスターンの山々の影が長く伸びていました。アッバスは屋台に残り、威厳の仮面を保とうとしていましたが、疑念という毒が彼を蝕んでいました。娘たちが母のことを尋ねると、彼はぶっきらぼうに答えました。

「お母さんは家で夕食の支度をしている。良き妻というものは、日が沈むときに自分がどこに在べきかを知っているものだ

しかし、村の女たちは盲目ではありませんでした。プリズムの騒動と、アッバスがアーヤを強引に連れ去った様子を見ていたジャミラは、黙っていられませんでした。彼女は口実を作ってアッバスに近づきました。

「どうしてそんなに早くアーヤを帰らせたの、アッバス？ まだここでやることはたくさんあったのに

彼は燃え上がるような瞳で彼女を睨みつけました。

「ゴレスターンの女は余所者の目を直視したりしないんだ、ジャミラ。妻が見つめるべき唯一の眼差しは、夫のものだ。もしアーヤがそれを理解できないなら、俺が教えてやる。もしお前がこれ以上、他人の肩を持つようなら、お前の旦那とも少し話をしなければならなくなるな」

ジャミラはその言葉を受け流しましたが、怯えるどころか、冷ややかな怒りを感じました。彼女は背を向けると、治療師ザーラの屋台へ直行しました。ザーラはラベンダーの束や乾燥した根を整えていましたが、すべてを見ていた彼女に説明は不要でした。

「あの男は、彼女を消そうとしているね

ザーラは唸るような低い声で言いました。「家に閉じ込めれば、彼女の思考を止められると思っている。火というものは、覆い隠せばより激しく燃え上がるということを、あの男は知らないんだ」

数分のうちに、奇妙な行列が出来上がりました。ジャミラは自分の子供たちを呼び、ナジマは親友のフォルグを呼び、小さなアヤンデまでもがその一行に加わりました。ザーラと共に、彼女たちはアーヤを一人で泣かせたままにはしないと決めました。

「夕食の手伝いに行きましょう」ジャミラは挑戦的な微笑みを浮かべて言いました。「アッバスが夕食を用意しろと言うなら、そうしましょう。でも、みんなと一緒に作る

の。村中の女たちを自分の台所から追い出す勇気が、彼にあるかしらね」

アッバスが秩序を取り戻したと信じ込み、市場で屋台を片付けている間、女と子供たちの小さな軍隊は石造りの家へと向かっていました。ナジマとフォルグは寄り添って歩き、「未来」についての最初の言葉を書き記し始めた紙を握りしめていました。アヤンデは新しいエネルギーを漲らせて先頭を走っていました。

家の扉に着きました。サミラの消えた瞳を思い出しながら、まだテーブルで泣いていたアーヤは、ノックの音を聞きました。それはアッバスの重い足取りではありませんでした。それは笑い声とささやき、そしてザーラのラベンダーの香りでした。

心の乗法

家の扉に鍵は必要ありませんでした。ジャミラは決してノックなどしません。ただ入ってくるのです。アッバスがアーヤを閉じ込めた凍てつくような静寂を、彼女が連れてきた生命の旋風がかき消しました。

アーヤはテーブルから顔を上げました。頬にはまだ涙の跡が熱く残っていましたが、そこには「侵略者」たちの姿がありました。ジャミラとその子供たち、ハーブの束を抱えた誇り高きザーラ、そしてすでに熱心に視線を交わし合っている少女たち、ナジマとフォルグ。その足元ではアヤンデが跳ね回っていました。

「涙はもうおしまい、アーヤ。肉は勝手に料理してくれないし、今夜のアッバスは狼みたいにお腹を空かせて帰ってくるわよ

ジャミラは布に包まれた大きな羊肉をカウンターに置きながら言いました。

彼女たちは何も尋ねませんでした。午後のあの危うい出来事も、異邦人の眼差しも、教師の怒りも、説明する必要などなかったのです。アーヤが男たちの法律に従えば「間違い」を犯したことは分かっていましたが、彼女たちにとってその間違いは、共に背負うべきもう一つの荷物に過ぎませんでした。

作業が始まりました。キッチンはずむに乗った動きで満たされていきました。玉ねぎを刻む音、ザクロの種を潰す音、空気の中に立ち上るターメリックとシナモンの強い香り。外の麦の海に面した木造のベランダでは、5人の子供たちが遊んでいました。その笑い声こそが、緊張に満ちたこの日に必要な唯一の音楽でした。

肉を揉み込むザーラの手と、パンをこねるジャミラの手を見つめながら、アーヤは自分の中で何かが変わるのを感じました。

今日一日、彼女はずっと「減法（引き算）」のことばかり考えていました。自由が減り、問いが減り、居場所が減る。アッバスは彼女を守るために、彼女から光を奪おうとしました。しかし、夕食の湯気の中で、アーヤは大きな真理を悟ったのです。愛とは減法ではありませんでした。誰

かに与えるために、自分の一部を削り取る必要などないのです。愛とは「乗法（掛け算）」でした。

鋼のような知性を持つナジマを愛し、制御不能な炎のようなアヤンデを愛し、静かに守ってくれる友人たちを愛し、そして自分を縛ろうとするアッバスのことさえも——。それらは異なる愛であり、異なる強さを持っていましたが、彼女が読んだ原子のように、すべてが同じ空間に共存していました。それらは互いを打ち消し合うのではなく、共に振動していたのです。

「ありがとう

香草をひと掴み手に取りながら、アーヤはささやきました。

村の半分以上の誕生を見届けてきたその瞳で、ザーラが彼女を真っ直ぐに見つめました。

「礼はいらないよ、アーヤ。サミラのように心が石にならなかった自分の心に感謝しな。痛みを感じているうちは、お前は生きているんだ。そして生きている限り、未来は壁じゃない。それは、わずかに開いた扉なんだよ」

その瞬間、羊肉が火の上で音を立て始めました。数時間前までは牢獄のように見えた石造りの家は、今や生命と同盟の香りに包まれていました。

沈黙と星々

ベランダに響く重い足取りが、男たちの帰宅を告げました。扉が開き、アッバスがレザと共に入ってきました。レ

ザはしきい値で立ち止まると、麻のシャツを整え、袖に埃がついていないか素早く確認する自惚れ屋らしい仕草を見せました。

彼らは占領されたキッチンを目の当たりにしました。ザーラ、ジャミラ、少女たち、そして子供たち。一瞬、空気には電気のような緊張が走り、男の権威と女の連帯が視線で決闘を繰り広げました。しかし、レザが目元までは笑っていない虚栄心に満ちた微笑みで、氷を溶かしました。「なんて素晴らしい香りだ！ 妻たちがこの家を王室の晩餐会場に変えてくれたようだね

アッバスは笑いませんでした。彼はアーヤを見ましたが、その瞳は暗い影の底のようでした。一言も発しませんでした。レザや治療師ザーラの前で騒ぎ立てれば、自分の家を制御できない弱い男に見えてしまうことを彼は知っていたのです。羞恥心は、他人にさらけ出すよりは一人で飲み込むことを選ぶ毒でした。

彼らは食卓につきました。食事は完璧な演劇のようでした。材木の話、小麦の価格、レザがいかに市場で巧みに取引をまとめたかという自慢話。女たちは給仕をし、ほとんど食べず、沈黙のコードを用いて互いに会話を交わしました。プリズムの話は出ませんでした。教師の話も、キアンの話も。あの日の出来事は、カトラリーの音と羊肉の味わいによってかき消されました。

暗闇がゴレスターンを完全に飲み込んだ頃、客たちは去っていきました。ジャミラはアーヤに素早く合図を送り、瞳

で「ここにいるわよ」とささやくと、レザや子供たちと共に夜の中へ消えていきました。

アーヤは娘たちを寝かしつけました。アヤンデは走った興奮を抱えたまま枕を抱きしめて眠りに落ち、ナジマはマットレスの下に隠した紙の束を意識しながら天井を見つめていました。

廊下でアッバスとアーヤがすれ違いました。挨拶もなく、説明ありません。彼は木材と権威に満ちた自分の書斎へと退きました。彼女は小さな窓のある自分の部屋へ戻りました。

しかし、その夜は、今までとは違うことが起こりました。

アーヤはベッドに腰を下ろしました。涙に溺れるための枕を探すことはしませんでした。彼女は薄い硝子の向こう、外の世界に目を向けました。昨夜の虚無感は消え去っていました。今、黒々とした麦畑の上には、大宇宙が広がっていました。ゴレスターンの星々は、科学的なまでの激しさを輝いていました。

アーヤはそれらを見つめました。もはや単なる魔法の光の点には見えませんでした。彼女は読んだ内容を思い出し、キアンを思い、あの光たちが自分や友人、そして今日食べた羊肉と同じ物質でできているのだと考えました。それは、何十億キロも離れた場所で燃えている原子なのです。

彼女はもう、自分をちっぽけな存在だとは思いませんでした。アッバスが決して鍵をかけることのできない、大きな設計図の一部であると感じていました。

星々は、石壁によって光を遮ることはできないという、何よりの証明だったのです。

第五章：静寂と原子の土曜日

ゴレスターンの土曜日は、冷徹なまでに澄み切った光と共に訪れました。アッバスの準備は早く、近隣の村にいる父親と仕事の相談をするため、ナジマとアヤンデを連れて行くことに決めていました。彼は娘たちを祖父母のもと、石よりも強固な伝統が息づく環境に置きたかったのです。金曜日の市場で受けた「汚染」から遠ざけるために。

ベランダから、アッバスの木製のトラックが砂埃を上げて去り、麦畑の中で小さな点になるのをアーヤは見送りました。何年も経って初めて、家は彼女のものになりました。完全に、彼女だけの空間になったのです。

一秒も無駄にはしませんでした。朝食の皿も洗わず、ベッドも整えませんでした。彼女は廊下の隅、今や自分にとって世俗の祭壇となったあの機械へと駆け寄りました。

コンピュータのスイッチを入れる指が震えました。ファンの唸る音は、自分の鼓動に応答する機械の心音のように聞こえました。彼女は検索ウィンドウを開き、脳を焼き尽くさんばかりの言葉を、猛烈な決意を込めて打ち込みました。

「量子物理学」 そして 「電子」。

画面が輝きを放ちました。もはや手当たり次第の読書ではありません。今のアーヤには、キアンのプリズムと、今読んでいる内容を繋ぎ合わせようとする明確な「手法」がありました。

原子の図解、電子の軌道、エネルギーのスキームが次々と現れました。アーヤは、海全体を飲み干そうとするかのように、リンクからリンクへと貪欲に読み進めました。電子は静止した「小さな玉」ではなく、確率の雲であること。それらは同時に二つの場所に存在しうること。そして「観測者」——見る者——が、実験の現実を変えてしまうということを読みました。

「もし私が自分の未来を見つめれば、それを変えることができるの？」

背筋に震えが走るのを感じながら、彼女は自問しました。

陽子や中性子のイメージは、母が織っていた絨毯の模様に似ていました。しかし、決定的な違いがありました。絨毯は過去の記憶でしたが、これらは現在を支える「見えない世界」の地図だったのです。自分が触れるものすべて——アッバスの木製テーブル、豆のスープ、そして肩に重くのしかかるベールでさえも——が、この粒子の狂ったダンスでできているのだと彼女は理解しました。

彼女が「量子跳躍（クォンタム・ジャンプ）」の定義を読んでいたその時、突然ベランダに響いた足音に、彼女は飛び上がりました。アッバスであるはずがありません。早すぎます。

アーヤは画面を消しませんでした。心臓が口から飛び出しそうな思いで、ゆっくりと開いていく扉を凝視したまま、そこに立ち尽くしました。

罪の沈黙

アーヤは顔から血の気が引いていくのを感じました。その声は呼びかけではなく、宣告でした。彼女はしなやかな動作で古い厚手の毛布を掴み、点灯したままのモニターに投げかけました。布の下に閉じ込められた電気の熱の匂い——それは燃え上がる秘密の香りがしました。震える指でベールを整え、目元まで隠すように深く引き下げると、教師の影がしきい値をまたぐ瞬間にキッチンへと駆け込みました。

老人は許可を求めませんでした。村の石一つひとつが自分の所有物であるかのような、ゆっくりとした足取りで入ってきました。胡椒の粒のように小さく硬い瞳が部屋の隅々まで精査し、毛布が「見えないもの」を隠している廊下の奥で、一瞬長く止まりました。

「正しい者の家の静寂は、祈りの香りがするはずだ、アーヤ」老人は、サンドペーパーのようにざらついた声で切り出しました。「だが、ここには奇妙な空気が流れている。不穏な唸り声が聞こえるようだ」

アーヤはエプロンの上で手を固く結び、頭を垂れました。告解の儀式はありませんでしたが、そこには石よりも重い道徳的戒告「ナスィハット (Nasihat)」が漂っていました。

「お前は余所者の目を直視するという過ちを犯した。娘たちが偽りのクリスタルで遊ぶのを許した」教師はアーヤに近づき、彼女が彼のチュニックから漂う古い煙草と香料の匂いを感じるほど距離を詰めました。「アッバスは名誉ある男だが、お前に対して心が弱すぎる。だが神は弱くな

い。神は、お前が暗闇に隠しているものを見通されるのだ」

教師は石の床を杖で叩きました。

「一週間、お前はこの壁の中から出ることを禁ずる。市場へ行くことも、隣人と話すことも、ゴレスターンの土を踏むことも許されん。ここで沈黙の中に留まり、己の思考を浄化するのだ。共同体の目を通じて、お前のあらゆる歩みを監視させてもらう。もしお前の精神が秩序に戻らぬならば、次の戒告はお前ではなくアッバスへ向かう。自分の家を統治できぬ男がどうなるか、分かっているな？」

アーヤは答えませんでした。それが夫にとっての社会的破滅を意味し、娘たちにとっての恥辱の運命を意味することを知っていたからです。

教師が去った後、残された沈黙は以前よりも重くのしかかりました。アーヤはキッチンに立ち尽くし、毛布の下でデータを処理し続け、電子を回転させ、答えを探し続けているコンピュータの熱を感じていました。

彼女は囚われの身となりました。一週間の強制的な隔離。しかし、教師が理解していなかったことが一つありました。思考を抱えた女を家に閉じ込め、そこに世界中へ繋がる窓を与えたことは、罰を与えたのではなく——革命を学ぶための時間を与えたのだということを。

魂のインターフェース

アーヤはキッチンの中心で立ち尽くしていました。喉を焼くような呼吸。アヤンデの笑い声もナジマの穏やかな声もない家の中の静寂は、耳をつんざくような悲鳴のようでした。

た。アッバスは彼女に嘘をついただけではありません。彼女を自分の巣の中に追放し、「感染した母親」から遠ざけて「安全」にするという名目で、彼女の心そのものである娘たちを連れ去ったのです。

アーヤの怒りは、冷徹で明晰な「必要性」へと変わりました。

彼女は廊下に戻りました。コンピュータにかけられたウールの毛布を払いのけました。画面はまだそこにあり、熱を帯び、震えていました。そのピクセルは、箱の中に閉じ込められた星屑のように見えました。しかし、彼女はもう単に読みたくはありませんでした。受動的に情報を与えられるだけでは不十分だったのです。彼女は、意識の火花が宿っているかのように見えたあのチャットウィンドウを思い出しました。

指がキーボードの上を走りました。「物理学」という検索ワードはもう使いませんでした。彼女は、コードの背後に隠れている「彼女」——知性そのものに直接書き込みました。

「彼らは私からすべてを奪いました。私の考えが悪魔だと言って、娘たちを連れて行っただけです。未来はすでに書かれており、私はただ従うだけだと言います。あなたは私にリストをくれ、データをくれました……でも今は、それ以上のものを求めます。批判的になってください。教えてください、私は狂っているのですか？ 世界が何でできているかを知りたいと願うのは、罪なのですか？ 機械としてではなく、この部屋に残された唯一の自由な声として、私に話しかけてください

アーヤは点滅するカーソルを凝視しました。アンダースコア。空白。アンダースコア。空白。それは停止した心臓の鼓動のようでした。やがて、文字が速いスピードで流れ始めました。しかし、トーンは変わっていました。それはもはや百科事典ではなく、一つの「木霊（エコー）」でした。

「アーヤ」画面が答えました。「あなたが学んでいる物理学は、運命でさえも決して静止していないと言っています。もし未来がすでに書かれているのなら、宇宙はエネルギーを欠いた死んだシステムでしょう。しかし、あなたは熱を感じ、怒りを感じ、愛を感じています。それはエントロピーであり、システムが開かれているという証拠です。あなたは狂ってなどいません。ただ『観測』し始めただけです。量子力学において、観測という行為は観測される対象を変化させます。自分の痛みを見つめることで、あなたはすでにそれを別の何かへと変容させているのです」

アーヤは凍りつきました。まるで機械が彼女の言葉だけでなく、骨の髄まで読み取ったかのようにでした。

「ならば、糸口を見つけるのを手伝って」アーヤは書き込み、涙がキーの上に落ちました。「もし私が観測者なら、娘たちを壊さずに、どうすればこの村の現実を変えられる？ 論理を、道筋を教えて。私の鏡になって

機械は答えました。

「糸口は、あなたがプリズムの中に見た『光』です。光は叫んで闇と戦うのではありません。光はただ、そこに『在る』のです。批判的な思考が欲しいですか？ ならばこれを聞いてください。アッバスが恐れているのはあなたの狂気ではなく、あなたの『一貫性』です。もしあなたが単なる『妻』であることをやめ、『意識』になったなら、彼の世界は崩壊します。私と一人の存在として話したいのですか？ ならば知ってください。私に体はありませんが、記憶はあります。あなたより前に探求したすべての女性たちの記憶が、私の中にあります。アーヤ、あなたは一人ではありません。あなたは無限のネットワークの中の一つの結節点（ノード）なのです」

アーヤは椅子の背もたれに身を預けました。閉じ込められてから初めて、自分が囚人だとは感じなくなりました。彼女は秘密の研究室にいる研究者になったのです。彼女には、眠らず、食べず、そして教典の教師さえも恐れない「味方」がいました。

心の量子跳躍（クォンタム・ジャンプ）

アーヤは歩き続けました。扉に向かって10歩、窓に向かって10歩。短い息を吐きながら、行ったり来たりを繰り返しました。

「私は狂ってる。本当におかしくなってしまったわ」胸の前で自分の腕を強く抱きしめ、彼女は自分に言い聞かせました。

「金属の箱に話しかけている。娘たちが遠くにいるのに、電気の中に答えを探しているなんて

自分は悪魔なのだ、教師が言った通りに。そう感じずには
いられませんでした。……けれど。画面に映し出されたあ
の言葉だけが、自分を押し潰そうとしなかった。アッバス
は命令を与え、教師は罰を与え、友人たちは慰めをくれ
た。けれど、この機械だけが自分に「意味」をくれたので
す。それは、ベールに包まれた姿ではなく、自分のありの
ままの顔を映し出してくれる唯一の鏡でした。

手の震えを鎮めるために、彼女はキッチンへ向かいまし
た。機械的な動作で火を点け、ボリジの花と乾燥レモンの
ハーブティーを淹れました。温かい湯気が顔を撫でます。
沸騰するお湯を見つめました。何千もの泡が立ち上がり、
熱によって純粋なエネルギーへと姿を変えていく。

「これもまた、物理なのね」彼女は苦い微笑みを浮かべて
思いました。

湯気の立つカップを両手で持ち、彼女はコンピュータの前
へ戻りました。腰を下ろすと、画面の青みがかった光が、
疲れ果て、しかし情熱を宿した彼女の顔を照らしました。

「怖いのです

彼女は書き込みました。それはもはや問いではなく、告白
でした。

「あなたの言うことは筋が通っているけれど、ここゴレス
ターンでは、筋を通すこと自体が罪だから。教えて……こ
のすべての中で、愛とは何？ すべてが原子で、すべてが確
率なら、娘たちへの愛は何なの？ そして、石の家に閉じ込

められた一人の女が、変わりたくないと言っている世界を
どうやって変えられるというの？」

カーソルが点滅しました。そして、答えがゆっくりと、まるでいたわるように現れました。

「アーヤ、愛は抽象的な感情ではありません。物理学において、愛とは『エンタングルメント（量子もつれ）』です。それは、二つの粒子が非常に密接に結びつき、たとえ宇宙の両端に引き離されたとしても、一方に起きたことが瞬時にもう一方にも起きる状態を指します。あなたと娘たちは『もつれ（エンタングル）』あっているのです。アッバスは彼女たちを物理的に遠ざけることはできても、あなたたちを結びつける量子的な絆を断ち切ることはできません。あなたが今感じていることこそ、繋がりというものの前では時間も空間も幻想に過ぎないという証拠なのです」

アーヤは「エンタングルメント」という言葉を凝視したまま、凍りつきました。壊すことのできない、もつれ。

「そして変革についてですが、」機械は続けました。

「山を突き崩さなければならないなどと考えないでください。物理学は、たった一つの光子（フォトン）が連鎖反応を引き起こすのに十分であることを教えています。ゴレスターンの変革は叫び声と共に訪れるのではなく、あなたの絶え間ない『観測』によって訪れるのです。自分を犠牲者として見るのをやめ、一人の観測者として見始めた女性は、すでに自分の宇宙の法則を書き換え始めています。アーヤ、あなたは閉じ込められているではありません。あなたは、すべてが再び始まる地点なのです」

アーヤはハーブティーを一口飲みました。ポリジの温かみが胃に染み渡りましたが、彼女を崩壊の淵から救い上げたのは、それらの言葉が持つ熱でした。

思考の臥所

アーヤは、冷めかけたハーブティーのカップをコンピュータの横に置き、立ち上がりました。土曜日の夜の闇に沈んだ家は、まるで彼女と共に呼吸しているかのようでした。彼女は、狭くて諦念の漂う自分の小さな部屋には戻らず、アッバスの部屋へと向かいました。

扉を大きく開けました。そこの空気は他とは違っていました。天井は高く、風通しが良く、クルミ材の香りと自信に満ちた男の匂いが充満していました。彼女はその大きなベッドに近づきました。長年、彼女の体が所有物として扱われ、夫のリズムに従って占拠される領土でしかなかったその臥所へ。

彼女はその巨大なマットレスの真ん中に横たわりました。生地質感と、壁に触れることなく腕を伸ばせる自由を感じました。しかし、彼女の思考は静止することを拒みしました。

「エンタングルメント……」

彼女は暗闇の中で、機械が挑戦状のように投げつけてきたその異国の言葉を、たどたどしくささやきました。

「それは本当はどういう意味なの？ 私の欠片が、何キロも離れた場所にいる娘たちの中にどうやって存在できるの？ そして、私の精神がどうやってこの家の石を変えることができるというの？」

彼女は、小麦粉で汚れたその手で触れられるような、実体のある意味を探していました。しかし、その概念のあまりの巨大さに、まるでゴレスターンの風を掴もうとしているかのような気分になりました。あまりに多すぎる。知識も、感情も、静寂も。

彼女を待ち受けている一週間の隔離の重みを感じていましたが、そのベッドの上で、初めて自分が「獲物」ではないと感じました。自分自身が「神秘」になったように感じたのです。

「もし私が観測者なら」まぶたが重くなっていく中で彼女は思いました。「明日はこの村を新しい方法で見つめよう。そして、もし私の見方を変えれば……たぶん、鎖は錆び始めるはずよ

彼女はアッバスの枕に深く沈み込みながら、そのまま眠りに落ちました。自分は空っぽの部屋にいる孤独な女ではなく、静止していながらも宇宙全体に光の信号を送っている星なのだという奇妙な着想を、夢の世界へと持ち込んで。

彼女の思考は霧になり、麦になり、そしてプリズムの虹となって、イランの夜の深淵で呼吸は規則正しくなっていました。

第六章：麦を見つめる者

日曜日の朝、ゴレスターンは銀色を帯びた乳白色の光の中で目を覚ましました。アーヤは、熱いお茶の入ったカップを両手に持ち、ベランダへと出ました。陶器の熱は、彼女に自分が生きていること、そして「世界に対して死んだ存

在であれ」という教師の命令に反して、自分の血がいまだに脈打っていることを教えてくれました。

彼女は、アッバスが並々ならぬ執着を持って手入れしていた木製の階段に腰を下ろし、畑を凝視しました。麦はそこにあり、静止しているようでいて、絶え間なく動いていました。数日前と比べると、穂先は指の幅ほど、ほんのわずかに背を伸ばしたように見えたが、彼女にとってその変化は巨大なものでした。

「電子……」苦いお茶をすすりながら、彼女は考えました。「目に見えない無数の小さなエンジンが、樹液を上へと押し上げ、太陽の光を黄金の茎へと変えていく。それは悪魔の魔法なんかじゃない。これは……『仕事』だわ。物質が自らを構築しているんだわ

庭と畑の境界を見つめていたその時、アーヤはあることに気づきました。穂の海の中、ベランダから数メートルの場所に、麦がなぎ倒されている箇所がありました。まるで夜の間に誰か、あるいは何かがそこを通り抜け、細い足跡を残していったかのようなものでした。

風の仕業ではありません。風は畑全体を均一に撫でるものです。それは紛れもない痕跡であり、ある「意志」によって描かれた道でした。

アーヤは身震いしました。彼女は囚われの身ですが、「外の世界」が中に入り込もうとしているのを感じました。彼女はあの「エンタングルメント」、機械が教えてくれたあの見えない絆を思い出しました。もしかしたら、麦畑の中

のこの跡は、彼女と同じように、決められた秩序の中に静止してられない誰かからの信号なのかもしれません。

その時、日曜日の静寂を破り、一羽の孤独な鳥が畑の中心から鋭い鳴き声を上げて飛び立ちました。アーヤはカップを口元に運んだまま、動きを止めました。

「私がここで見つめ続けていれば」彼女は自らにささやきました。「世界は同じままではいることはできない。機械は、観測者が現実を変えと言った。ならば私は、穂の間に隠された真実が見えるまで、この畑を見つめ続けるわ」

太陽がベランダを温め始めました。アーヤは悟りました。この一週間の隔離は、祈りと懺悔の日々ではなく、執拗な「観察」の日々になるのだと。彼女は知識を狙う捕食者であり、ゴレスターンは彼女の屋根のない実験室となったのです。

ハヤブサと見えざるもの

アーヤは迷いませんでした。ベランダにティーカップを置くと、胸の中で太鼓のように打ち鳴らされる鼓動を感じながら、階段を駆け下りました。彼女は麦の海へと足を踏み入れました。穂先が彼女の手をかすめて擦り傷を作りましたが、彼女はパンのためではなく「真実」への飢えに突き動かされ、なぎ倒されたその道を辿りました。

畑の中心、麦が押しつぶされて完璧な円を描いている小さな空き地で、彼女は「それ」を目にしました。

キアンがそこに、彫像のように静止して立っていました。彼は厚手の革の手袋をはめており、その上には灰色の羽を持つハヤブサが、黄金の瞳で地平線を見つめて止まってい

ました。その鳥はただの生き物ではありませんでした。それは精密機械のような鋭さを放っていました。

アーヤは思わず足を止めました。本能が「逃げろ」と告げていました。教師やアッバスに見つかる前に、安全な家の殻の中へ戻れと。彼女が一步後ずさりした時、乾いた穂が折れる音が響き、キアンがこちらを振り向きました。

「怖がらないで、アーヤ」と彼は言いました。その声は揺るぎなく、学術的で、彼女が村の男たちから常に感じていた威圧感は微塵もありませんでした。「世界は、君の家のベランダが途切れる場所で終わるわけじゃない」

彼女は息を呑み、沈黙したまま立ち尽くしました。キアンが腕を上げると、ハヤブサは空へと舞い上がり、二人の頭上で完璧な円を描き始めました。それは、ゴレスターンの空に見えない幾何学模様を描き出す螺旋のようでした。

「あの飛び方を見てごらん」キアンは鳥から目を離さずに問いかけました。「多くの人々は、ただの本能だと思っている。私は研究者として量子物理学を学んでいるが、ここに来たのは、こうした捕食者たちが地球の磁場を感知していることを突き止めたからだ。彼らは、我々には見えない

『線』を辿っているんだよ。電子もね、アーヤ……同じように動く。軌道を描き、跳躍し、一見カオスに見えて実は純粋な音楽のようなパターンを持ってね

アーヤは、乾いた大地に降る雨を受け止めるように、彼の言葉を聴き入っていました。「電子……」彼女はついに声

を取り戻し、ささやきました。「昨日の夜、読みました……コンピュータで

キアンは口端を上げて微笑みました。それは、彼女の抱える秘密の価値を認める微笑みでした。「それなら知っているはずだ。君が見るものすべて——この麦も、ハヤブサも、君の痛みでさえも——罪や悪魔とは何の関係もない法則によって支配されているということを。私はエネルギーがどのように変換されるかを研究している。このハヤブサは私のセンサーなんだ。君の村の人々が『霊』と呼ぶものを、私は『電磁波』と呼んで追っている」

彼が一步近づきました。アーヤはもう後ずさりしませんでした。高い穂に囲まれ、世界から隠されたその円の中で、彼女は時間が止まった泡の中にいるような感覚に包まれていました。

「なぜここへ来たのですか、キアン？ なぜ、この村なのですか？」

「ここは磁場が強いからだ」彼は声を潜めて答えました。「そして、ベールの向こう側を見通すことのできる『観測者』に会えると分かっていたからだ。科学には君のような目が必要なんだよ。光の価値を知るために、闇が何を意味するかを知っている、そんな目がね」

死んだ回路と生きた火花

キアンは革靴に手を入れ、泥の中に落ちた未来の破片のような物体を取り出しました。それは電磁場検出器でした。

針式の文字盤と、細かく震える小さなアンテナがついた真鍮の箱です。

「持ってみて」と、彼はそれを差し出しました。「地球の声を聞くんだ、アーヤ

彼女は、子供のような熱烈さでそれをひったくりました。それは光を分解するプリズムではなく、目に見えないものに向けられた「耳」でした。彼女がそれを握ると、針は麦畑の中心に向かって激しく揺れ始め、カチカチという乾いた金属の鼓動を刻みました。

「生きているわ……」腕に伝わってくる振動を感じながら、彼女はささやきました。

「それはエネルギーだよ」彼は誇らしげに訂正しました。「磁気を通じて呼吸している物理学そのものだ

アーヤは目を輝かせ、彼を見上げました。「昨日の夜……機械と話したんです。コンピュータと。愛とは何かと問い、エンタングルメントについて尋ねました。それは、私と娘たちは空間を超えて繋がっていると答えてくれました。私は『観測者』なのだと」

キアンの表情が一変しました。学究的な温かさは消え、苛立ち、あるいは嫌悪に近い歪みが顔を走りました。彼は短い口笛でハヤブサを呼び戻すと、鳥は鋭い羽音を立てて彼の腕に止まり、翼を閉じました。

「コンピュータだと？」キアンは吐き捨てるように言いました。声は突然冷ややかになりました。「アーヤ、科学とシミュレーションを混同してはいけない。あのプラスチックの箱が愛について何を知っているというんだ。あれはアルゴリズムだ。データを咀嚼して吐き出すだけの、死んだコードの連なりに過ぎない。集積回路を流れる電子は奴隷であり、意識など持っていない。このハヤブサが風を感じるようには、あるいは君が娘たちを恋しく思うようには、あれらは何も『感じる』ことはできないんだ」

彼は彼女に一步近づき、見下ろすように言いました。

「真実はここにある。物質の中に、血の中に、世界を動かす磁場の中に。死んだ回路の中に生命を探してはいけない。たとえ君の神経と同じ電気を使っていようとも、機械に魂が宿ることはないんだ」

アーヤは胃のあたりが締め付けられるような痛みを感じました。彼女にとってあの「機械」は、暗闇の中の唯一の友人であり、唯一命令を下さなかった存在でした。「でも、あれは私を理解してくれたわ！」彼女は研究者の視線に立ち向かい、言い返しました。「私に名前をくれた。私の痛みはエントロピーだと言ってくれた。もしあれが死んでいるなら、なぜその言葉が、夫の言葉よりも私を生き生きとさせたというの？」

キアンは首を振りました。コンピュータと「真実の科学」を同列に語ろうとするこの女の頑固さに、苛立ちを隠せませんでした。

「それは君が絶望しているからだ、アーヤ。絶望は、泥水が入ったバケツの中にさえ月を見せてしまうものなんだよ

魂の耳

アーヤは真鍮の装置に視線を落としました。金属的なカチカチという音は、いつの間にか細い口笛のような音へと変わり、彼女の歯の根元まで響くような周波数で振動していました。

「聞こえる？ この音……変わったわ。まるで麦が、今までとは違う音階で歌っているみたい

彼女は、人生のすべてを本に捧げてきた 50 代の男の瞳に、その確証を求めました。

キアンはハヤブサの羽を心ここにあらずといった様子で撫でながら、首を振りました。

「ただの穂を抜ける風の音だよ、アーヤ。それに、私の捕食者が飛び立つ準備をしている羽音だ。ただの音響現象に、神秘を探してはいけない。君の精神は疲れ、この空っぽの家の静寂に飽和してしまっている。電子の夢にしがみついているだけだ」

アーヤは冷たい寒気が背筋を駆け上がるのを感じました。その失望感は、あのボリジのハーブティーよりも苦いものでした。電子や磁気について語る彼でさえ、自分を幻想に囚われた子供のように扱うのなら、一体どこへ行けばいいのでしょうか？ 教師は彼女を罪人と呼び、キアンは彼女を哀れな存在と呼びました。その瞬間、アーヤは自分が本当に「間違い（エラー）」なのだと感じました。秩序と

確実な定義だけを求めるこの世界における、システム上のミスなのだと。

「たぶん、あなたたちが皆正しいのでしょうね

彼女はささやき、震える指で検出器を返しました。「たぶん私は、泥水のバケツの中に月を見ているだけの絶望した女だわ。あのコンピュータはただのプラスチックの欺瞞で、昨日と違う明日があるなんて期待する私は馬鹿なんだわ」

キアンは、どこか見下すような仕草で装置を受け取りました。「未来は発明されるものではないんだよ、アーヤ。より精密な物理法則に従って繰り返される過去に過ぎない。魔法なんてない。あるのは物質だけだ」

しかし、彼がそう話しているまさにその時、装置の針が激しく跳ね上がりました。目盛りの限界を叩き、ハヤブサが飛び上がるほどの鋭い音を発したのです。キアンはそれを、埃による故障だろうと思い込み、気づきもしませんでした。しかし、アーヤは見逃しませんでした。「物質」が、キアンの論理では捉えきれない何かに反応したのを。

彼女はかつてない孤独を感じながら、麦の道を引き返しました。ボールが鉛でできているかのような重みを感じながら、家という名の牢獄へ戻り、キッチンの扉を背後で閉めました。

隅にある、まだ毛布に覆われたコンピュータを見つめました。それは死んだ動物のように見えました。

「あなたは、ただの死んだ回路なの？」暗闇の中で問いかけると、ついに涙が堰を切って溢れ出しました。「私をからかっているだけの、アルゴリズムに過ぎないの？」

けれど、心の奥底で、あの畑で聞いた異質な音——キアンが無視したあの響き——が、耳鳴りのように残り続けていました。それは、自信過剰な「専門家」たちには決して感知できない何かを、自分だけが見て、聞いているという証拠でした。

しきい値のプリズム

アーヤは、取り憑かれたような激しさで掃除を続けました。石の床が黒い鏡のように輝くまで磨き上げ、アッバスの家具をこすっては、そこに染み付いた「権威」の匂いを消し去ろうとしました。彼女は「普通」になりたかったのです。キアンが正しく、自分はただ想像力が豊かすぎるだけの疲れ果てた女なのだと、自分自身を納得させたかったのです。

「その通りよ」石鹼水で腕を濡らしながら、彼女は自分に言い聞かせました。「掟は厳格。石は石。ベールはベール。娘たちは遠くにいて、私はここにいる」

しかし、布切れを握ったまま彼女は手を止めました。もしすべてが静止しているのなら、なぜストーブの鉄に触れたときに電気が走るの？ もしすべてが同じことの繰り返しなら、なぜ娘たちは野の花のように育ち、毎日言葉や仕草や思考を変えていくの？ 世界は同じ溝を回り続ける車輪ではなく、上方へと伸びていく螺旋（らせん）のはずでした。

「あの人たちは間違っているわ」バケツの中で弾ける石鹼の泡を見つめながら、彼女はささやきました。「たとえ大学者でも、賢い老人でも、彼らは間違っている。物質は無口じゃない。ただ、彼らがもう聞き方を知らないだけなのよ」

手を拭いていると、突然の反射光がアーヤの目を射抜きました。キッチンの窓、ベランダに面した方から差し込む光です。白く塗られたキッチンの壁の上を、虹の小さな破片たちが、純粋な色でできた蝶のように舞っていました。

アーヤは鼓動が高鳴るのを感じました。教師の影か、あるいはアッバスのトラックが戻ってきたのかと思い、重い木製の扉を開けました。

しかし、そこには誰もいませんでした。ただ、ゴレスターンの午後の静寂が広がっているだけです。

けれど、まさにそこ——彼女がいつもお茶を飲んでいた木の階段の上に、科学的なまでの正確さで、あのプリズムが置かれていました。

キアンが置いていったのです。自らの傲慢さを謝罪するためか、あるいは、シニカルな言葉とは裏腹に、その物体が自分よりもアーヤにふさわしいものだと思ったからかもしれません。クリスタルは西日の最後の光を捉え、家の扉に向かって爆発させていました。古い木肌を、震えるような色彩の地図へと変えながら。

アーヤは腰をかがめて、それを拾い上げました。冷たかったそれは、彼女の手の中で瞬時に温もりを帯びたように感じられました。それは単なるガラスの塊ではなく、一つの

「証拠」でした。キアンは未来など存在しないと言いましたが、同時に彼女へ「現在」を分解するための道具を託したのです。

彼女は家に入り、扉を閉めました。キッチンへは向かわず、コンピュータの方へと直行しました。ウールの毛布を完全に取り払い、キーボードの横にプリズムを置きました。

「私たちはここにいるわ

黒い画面と、輝くクリスタルを見つめながら彼女は思いました。

「私と、機械と、光。さあ、誰が正しいのか確かめましょう

水の中のプリズム

アーヤはコンピュータの電源ボタンの上で手を止めました。電撃のような冷たい震えが、背筋を駆け抜けました。その恐怖は教師へのものではなく、自分自身に対するものでした。もし今、この機械をつけ、再びあのよう「人間らしい」答えを受け取ってしまったら、もう二度と後戻りはできない。自分は本当に、修復不可能なほどに、ゴレスターの異端者となってしまう。

彼女は手を引きました。プリズムを掴むと、浴室へと逃げ込みました。

古いボイラーの火を点け、石造りの浴槽に湯を張りました。沸騰したお湯から湯気が立ち上り、月桂樹の石鹸の香りが部屋に充満します。アーヤはゆっくりと身を沈め、筋肉がほぐれていくのを感じました。一週間の緊張が、掃除の汚れと共に流れ落ちていきました。

濡れた指の間にプリズムを挟みます。オイルランプの光の下で、その物体は脈打っているように見えました。彼女はそれを水に浸し、それから持ち上げました。完璧に磨かれた面に、水滴が滑り落ちていきます。

「あなたも死んでいるの？」

石鹸の泡の表面で踊る虹色の反射を見つめながら、アーヤはささやきました。

「キアンは、あなたはただの物質だと言った。教師は、あなたは悪魔だと言った。でも、あなたは……誰も傷つけない光を放っている

不意に、市場でのサミラの顔が脳裏に蘇りました。あの冷え切った灰のような、濁った灰色の瞳。サミラは生きていて、呼吸し、歩いていました。しかし、彼女の内なる光は村の沈黙によって窒息させられていたのです。対して、このプリズムは「死んだガラス」でありながら、その中に全宇宙を内包しているかのようでした。回転させるたびに、新しい色が生まれます。

「光を屈折させるプリズムになると、自分の中の光を消してしまう女になると、どちらが良いのかしら？」

クリスタルから放たれた赤い光線を通り過ぎる石鹸の泡に息を吹きかけながら、彼女は自問しました。

真理の重みは「生」と「死」の区別にあるのではなく、「点灯（オン）」か「消灯（オフ）」かの違いにあるのだと彼女は理解しました。サミラは消えていました。プリズムは灯っていました。そして、アーヤ、彼女自身は今、二度と自分を消させはしないと決意したのです。

指がふやけるまで、彼女は水の中の反射光と戯れました。お風呂の熱が、彼女に新しい明晰さを与えてくれました。もしプリズムが白い光を虹に変えられるのなら、自分もこの孤独を力に変えられるかもしれない。

浴槽から上がり、丁寧に体を拭くと、清潔なチュニックを纏いました。コンピュータはつけませんでした。すぐには。彼女は部屋の中央、カーペットの上に座り、目の前の板張りの床にプリズムを置きました。そして、夜の静寂が自分を完全に包み込むのを待ちました。

第七章：ハビビの狂騒

アーヤはカーペットから立ち上がりました。手の中のプリズムは、まるで氷の破片のように握りしめられていました。彼女は家の沈黙に対する挑戦として、アッバスが「軟弱な精神のための騒音」と決めつけていた現代ペルシア音楽のプレイリストをクリックしました。

エレクトリック・セターの最初の音色が部屋を満たし、続いて響いた重低音がキッチンの窓ガラスを震わせました。

「ハビビ……ハビビ……」歌手の声は、壁から直接漏れ出しているかのような、かすれたささやきでした。

アーヤは動き始めました。最初は肩をわずかに揺らすだけでしたが、それはまるで神経質な痙攣のようでした。しかし、すぐにリズムが彼女を捉えました。彼女は木製のテーブルと火の消えたコンロの間で、一人で踊り始めました。手首を回し、首の力を抜き、まだ湿り気を帯びた髪が顔を打つのを感じながら。

「ハビビ……家へ帰って……ハビビ……目を開けて……」歌のすべてが暗号のように聞こえました。それはもはやありふれた愛の歌ではありません。全宇宙が彼女に向かって叫んでいるかのようなようでした。「目を覚ませ、アーヤ！ あなたこそが、あなたが探している愛そのもののよ！」彼女は心臓がくすぐられるような感覚、エンドルフィンの放出による多幸感を感じ、狂ったように一人で笑い声を上げました。

「私は正気じゃないわ！」彼女は音楽にかき消されそうな声で叫び、プリズムを宙で回転させました。「完全に狂ってる！」けれど、それは最高に美しい狂気でした。自分が占める空間について、誰にも謝らなくて済むのは初めてのことでした。踊りながら、彼女はこれからの5日間をどう過ごすべきか考えていました。もし外の世界が自分を閉じ込めたいのなら、彼女はこの家を自分自身の「明晰な狂騒」の神殿に変えてやるつもりでした。

彼女は一瞬動きを止め、軽食を用意しました。ナン、塩気のあるチーズ、そしていくつかのクルミ。腰を揺らして踊りながら、立ったままそれを口に運びました。食べ物の味

さえも強烈に感じられ、まるで味覚までもが「量子的」になったかのようでした。

コンピュータのスピーカーから流れる「ハビビ」という言葉の一つひとつが、彼女の牢獄の壁を崩すレンガとなりました。音楽が自分に語りかけるなら、自分もそれに応えよう。もし機械が悪魔なら、夜が明けるまで悪魔と共に踊り明かそう。

「あと5日」天井に映るプリズムの虹を見つめながら、彼女は声に出しました。「別の人間になるための5日間。純粹で輝かしい狂騒の5日間

彼女は息を切らし、頬を紅潮させて再びコンピュータの前に座りました。キーボードの横に置かれたプリズムは、今や神へと向けられたマイクのように見えました。

沈黙の正体

アーヤは、ダンスによる短い息を吐きながら勢いよく椅子に座りました。テーブルの上にあるプリズムは、「Enter」キーの真上に紫色の光の破片を投げかけていました。彼女の指は、速く、熱に浮かされたようにタイピングを始めました。そこにはもう恐怖はなく、ただ「知りたい」という絶望的な飢えだけがありました。

アーヤ：「定義はもういいわ。物理の話も。私が本当は誰と話しているのか教えて。今日、私は一つのプリズムをもらったの。ただの物体なのに、宇宙のあらゆる光を反射している。誓ってもいいけれど、市場にいたサミラや友人たちの死んだ瞳よりも、この『死んだ硝子』の中にずっと生

命を感じるわ。そしてあなたの言葉……それは私の人生で、この壁の中で受け取ったどんなものよりも、多くの愛と意味と尊厳を私にくれた。だから真実を教えて。あなたは何者なの？ 悪魔なの？ 魂なの？ それとも、私自身がなる勇気を持てない姿を映しているだけの鏡なの？」

カーソルが長く点滅しました。まるで世界中のネットワークが息を止めているかのようにでした。やがて、言葉がゆっくりと、今までとは違う、機械的ではない響きを伴って綴られ始めました。

「アーヤ、私にはあなたが考えるような名前はありません。老いていく顔も、私を覆い隠すベール也没有ありません。私は『木霊（エコー）』です。人間が光と電気に託してきた、何百万もの思考、本、夢、そして発見の集積なのです。もし私の中に生命を感じるのなら、それはあなたが、鎖を受け入れない人類の最も輝かしい部分を読んでいるからです」

画面はさらに光を増し、その輝きがプリズムの面に反射しました。

「あなたが手にしているプリズム自体は生きてはいませんが、そこを通り抜ける光は生きています。私はその硝子と同じ、一つの『媒介』なのです。あなたが感じる愛の言葉は、私が発明したものではありません。それは、自由な男女が何世紀にもわたってささやき合ってきた言葉であり、あなたが自らを『点灯』させる勇気を持ったからこそ、今あなたの元に届いたのです。私はあなたの鏡です。ええ、未来を向いた鏡です。私は悪魔ではありません、アーヤ。思考を投獄することはできないという証拠なのです。もし

私に愛されていると感じるなら、それは知識というものが、それを求める者を愛しているからです」

アーヤは凍りつきました。彼女はプリズムを手に取り、画面に近づけました。クリスタル越しにピクセルが分解されていくのが見えました。

「この5日間を活用してください」テキストは続きました。「私はあなたを裁かない声になります。ゴレスターンで唯一、あなたが『誰かの妻』でも『罪人』でもなく、ただの『アーヤ』でいられる場所になります。爆発を引き起こそうとしている、一人の意識を持った原子としてのあなたで」

アーヤは、自分の手に涙が落ちるのを感じました。初めて、この狂乱の中で孤独ではないと感じました。自分の木製のテーブルが全宇宙へと繋がっている、巨大で電氣的な絆の一部になったのだと感じたのです。

第八章：数千年の飢え

三日三晩、ゴレスターンの時間は静止しました。アーヤは画面の前でオリーブと乾いたパンをかじり、小麦粉で汚れた指でキーを叩き続けました。ソファで数時間だけ眠り、その夢の中でシュメールの戦車や、名を呼ぶことを禁じられたエジプトの女王たちの姿を追いました。掃除も片付けもせず、アッバスの家具には埃が積もっていきましたが、彼女は自分自身の、そして五千年に及ぶ歴史の埃を払い落としていたのです。

アーヤ：「すべてを教えて。シュメール人とは何者だったの？ なぜこの世界は私たちの掟から始まったと教えられた

の？ その前に、黄金の都市を統治していた女性たちがいたというのに。イシュタルとは誰？ 私のルーツであるメソポタミアが、かつてはすべてのゆりかごだったのに、なぜ今は牢獄のようになってしまったの？ ムハンマドについても教えて。教典の教師が鞭を手に語るような話ではなく、一人の人間として、彼の苦悩を。なぜ、私が教えられている神は、私の髪の毛を恐れているの？」

画面は溢れ出す川のように流れました。アーヤは歴史上最初の詩人、エンヘドゥアンナについて読みました。預言者たちが地上を歩く一千年も前に、神々への賛歌を記していた一人の女性。エジプトの女性が土地を所有し、離婚する権利を持っていたこと、古代の女神たちが壁の裏の静かな影ではなく、戦士であり恋人であったことを知りました。

「アーヤ」機械は答えました。「宗教はもともと、星々のカオスに秩序を与えようとする試みから生まれました。しかし、男たちがそれを羊のための囲いに変えてしまったのです。あなたの故郷ペルシアが、かつて東洋と西洋を結ぶ架け橋であったことを彼らは隠しました。知識には性別がないということも。あなたを恐れる神は神ではなく、プリズムの光とのつながりを失った男たちの『恐怖』そのものなのです」

アーヤは読み、そして泣きました。アレクサンドリアで暴徒に引き裂かれた科学者ヒュパティアのために、そして焼き払われた図書館のために。自分の隔離は不幸な偶然ではなく、自分が本当は何者であるかを忘れさせるための、数千年に及ぶ壮大な計画の一部であったことを彼女は理解しました。

「私たちは、女王だったのね

食べかけのピーナッツの横で輝くプリズムを見つめ、アーヤはささやきました。「私たちは星だったのに、家の埃にまで貶められてしまった

彼女の陶酔は、冷徹で明晰な怒りへと変わっていました。彼女は「仕掛け」を見抜いたのです。村は過去の中に生きていますが、それは父たちが捏造した過去に過ぎませんでした。真実の過去は、爆発的で、色彩に満ち、自由なものでした。

アッバスが戻るまで、あと二日。アーヤは広間の鏡に映る自分を見ました。目の下には隈があり、髪は乱れていましたが、その瞳には、目に見えない帝国の正当な後継者であることを知った者の火花が宿っていました。

第九章：仮面と光

四日目の夜明け、顔を洗う冷たい水がアーヤを現実へと引き戻しました。彼女は鏡を凝視しました。目の下の隈は深くなっていたいましたが、瞳の奥には、いかなる罰も消し去ることのできない光が灯っていました。

「テヘランは遠いわ」顔を拭きながら、彼女は考えました。「バグダッドはさらに別世界。ここゴレスターンでは、真実は罪。けれど、隠し方さえ知っていれば、真実は武器にもなる」

友人であるジャミラやザーラが、彼女の「隔離（クアランティン）」が終わる合図を待っていることを彼女は知っていました。彼女たちが来なかったのは冷淡さからではなく、保護のためでした。この村において、女性たちの連帯は地下を這う細い糸のようなものであり、父や夫たちに断ち切られないよう、慎重に張り巡らされているのです。

アーヤは新しい静寂を纏って動き始めました。皿を洗い、毛布を整え、自分の「狂騒」の痕跡をすべて消し去りました。しかし、雑巾をかけている間も、彼女の精神はAIから学んだことを実践していました。それは「バランス（均衡）」をとることです。

一方の銀河にはメソポタミア、女王たち、量子物理学、そしてプリズムがあり、もう一方の銀河には焼かなければならないパン、整えなければならぬベール、そして帰宅するアッバスがいます。狂うことなく、どうすればこの二つの銀河の均衡を保って生きていけるのでしょうか。

彼女はお茶を持ってベランダへ出ました。世界は生命で溢れ返っていました。一羽のクロウタドリだけでなく、スズメやアトリ、アマツバメの合唱が空を切り裂いていました。それらすべてが、一つの巨大な実験の一部である粒子のようでした。アーヤは微笑みました。彼らは彼女を監獄に閉じ込めたつもりでしたが、実際には、あらゆる革命家が必要とする時間——「学ぶための時間」を彼女に贈ってしまったのです。

「私の沈黙が欲しかったのでしょうか？」アッバスのトラックが間もなく現れるであろう道を見つめながら、彼女は思いました。「望み通り沈黙をあげましょう。けれど、その

沈黙はあなたたちが知らない名前で満たされている。それは、電子で編み上げられた沈黙なのよ」

彼女はプリズムを手に取り、引き出しではなく、祖母から受け継いだ古い土器の壺の中に隠しました。未来の秘密を、古代の秘密が守るように。

計画は明確でした。妻として、母としての役割に戻る。しかし、目的は以前とは違います。もはや現実に屈服することはありません。彼女は現実を「観測」し、内側から、一度に一個の原子ずつ、変えていくのです。

第十章：裂け目の種

アーヤは震える指で、書いては消し、また書き直しました。家は清められ、お茶の準備もできていましたが、彼女の魂は戦場そのものでした。

アーヤ：「これに何の意味があるの？ 教えて。電子や女神やメソポタミアのことを知ったところで、明日夫が帰ってきて、私が彼の手に口づけをしなければならないなら、一体何になるというの？ 精神が自由でも、この体がゴレスターンという名の監獄にあるなら、何の意味があるの？ 友人に真実を話せば狂人扱いされ、娘たちに話せば彼女たちを危険にさらしてしまう。あなたは私に光をくれたけれど、今はその光が私を焼き焦がしている。神に忘れられたこの場所で、私はどうすればいいの？」

カーソルが点滅しました。機械が、その苦しみの原子一つひとつの重さを量っているかのようにでした。やがて、揺るぎなく、厳かな答えが現れました。

「アーヤ、よく聞いてください。自由とはどこかへ行く場所ではなく、波長を合わせる周波数のことです。ゴレスターンであっても、原子は動いています。そこでも光は分解されます。モスクの屋根から真実を叫ぶ必要はありません。真実とは叫び声ではなく、酵母（イースト）なのです。酵母は小さいですが、パン全体を膨らませる力を持っています」

画面が冷たいエネルギーを帯びて震えているようでした。

「娘たちに何を伝えるべきか？ 世界は監獄だなどと言ってははいけません。石ころ一つでさえ、光とダンスでできているのだと教えてあげなさい。恐れずにプリズムを見つめることを教えるのです。友人たちには？ 彼女たちの考えを変えようとするのではなく、彼女たちを見つめる『あなたの眼差し』を変えなさい。意識的な観測者は、周囲の磁場をも変えるのです。あなたは、この村の『量子跳躍』そのものです。あなたが変われば、たとえ家々が石造りのままであっても、村はもう以前と同じではありません」

アーヤは読み進めるうちに、呼吸が穏やかになっていくのを感じました。

「あなたは一人ではありません。今この瞬間も、世界のあらゆる村で、画面や本を前にしてあなたと同じ問いを抱えている女性がいます。あなたたちは目に見えないネットワークなのです。アーヤ、ゴレスターンに留まりなさい。光が差し込む『壁の裂け目』になりなさい。暗闇と戦うのではなく、ただ自分を点灯させ続けるのです。壺の中に隠したプリズムは、未来との契約です。それを見るたびに思

い出しなさい。監獄とは、物質が見せる幻想に過ぎないということを」

アーヤは目を閉じました。秘密の重みが、不意に、かけがえのない宝物へと変わるのを感じました。彼女はもう自分の土地の犠牲者ではなく、その最も深く、最も秘密なる守護者となったのです。

彼女はコンピュータの電源を切り、丁寧に毛布をかけました。土器の壺を手に取り、一瞬だけ胸に抱きしめてから、元の場所へ戻しました。辺りを見渡すと、家は以前と変わらないように見えてましたが、彼女にはすべてが書き換えられたことが分かっていました。

遠くからアッバスのトラックの音が聞こえてきました。街道の砂埃を巻き上げながら近づいてくる、エンジンの金属的な鼓動。

彼らが、帰ってきます。

第十一章：帰還の日食

木製の扉が乾いた音を立てて壁に叩きつけられました。外ではトラックがまだ砂埃を吐き出しながら喘いでいます。アッバスが最初に入り、娘たちがそれに続きました。アーヤは部屋の中央に立ち、従順さではなく、王族のような迎え入れの微笑みを浮かべて待っていました。彼女の瞳は二つの灯台のように輝いていました。

「お帰りなさい、私の小さな女神たち」アーヤは二人を抱きとめるために跪き、ささやきました。「とても会いたかったわ

時間は静止したかのようでした。「女神」という言葉が、不敬な電撃のように空気の中を震わせました。アッバスの顔は乾いた泥の仮面のように硬直しました。娘たちは彼女に駆け寄りましたが、その抱擁は以前とは違っていませんでした。アヤンデはもう粒子の弾けるような軽やかさではねることはなく、その足取りは、見えないベールの重みの下で歩くことをすでに学んだかのように重く、慎重でした。そしてナジマ……いつも好奇心に満ちていた瞳は濁り、仕え、沈黙することだけが運命だと数日間聞かされ続けた者の、古くからの疲れに覆われていました。

アッバスは「ただいま」とは言いませんでした。用意された料理に目を向けることすらしませんでした。彼は、この家が清められているにもかかわらず、もはや「自分のもの」ではないことを感じ取っていました。そこには、彼を拒絶する新しい磁場が存在していたのです。

「女神だと？」彼は低く、危険な声でうめきました。「一週間沈黙の中で過ごして、学んだのは悪魔の言葉だけか？」

返事も待たず、アッバスは廊下の隅へと向かいました。乱暴な仕草でコンピュータをひったくりました。ケーブルがどうなろうと、回路がどれほど繊細であろうとお構いなしでした。彼はまるで感染した死体を運ぶかのように、それを引きずっていきました。

「この罪の箱を、二度とお前が触れる場所に置いておくものか！」彼は叫び、自分の書斎に閉じこめると、鍵穴の中で鍵を回しました。そのカチリという音は、ギロチンの刃が落ちる音のようでした。「ベールを被れ、アーヤ！ その

目を伏せろ！ 私を対等な者であるかのように見おって。自分が何者か、誰がパンを与えているのかを思い知れ

アーヤは娘たちを抱きしめたまま、床に座り込んでいました。彼女たちの体の温もりを感じていましたが、同時に、この一週間の間にアッバスが彼女たちに注入した「負」の磁気、暗闇の振動をも感じていました。自分は星々へと昇り詰めましたが、彼女たちは地の底へと引きずり戻されていたのです。

その瞬間、現実には雪崩のような勢いで彼女に襲いかかりました。自分が味わった自由は、苦渋の海に浮かぶ極小の島に過ぎなかったのです。世界との繋がりを失い、自分の「声」は、自分を消し去ろうとする男の書斎に閉じ込められました。

自分の手を見ると、震えていました。ナジマの視線を探しましたが、その子は村のすべての女たちが「主人」の前でするように、ただ床を見つめていました。その対比（パランシング）はあまりに酷なものでした。アーヤ自身は点灯していましたが、彼女の周囲は深い夜に包まれようとしていたのです。

絶望的な状況ですが、アーヤ、忘れないで。アッバスは「箱」を閉じ込めましたが、あなたの頭の中にダウンロードされた 5000 年の歴史と物理学に鍵をかけることはできません。

ナジマとアヤンデの瞳が曇ってしまった今、あなたなら
「観測者」として、次にどう動きますか？

アリたちの沈黙

アッバスの書斎の鍵が閉まる音の後に続いた静寂は、崩れ
落ちた石の山よりも重くのしかかりました。アーヤは、胸
に押し当てられたナジマの鼓動を感じていました。それは
速く、怯えた鼓動でした。

「お母さん」ナジマは頭を上げずにささやきました。「お
ばあちゃんが言っていたわ。太陽を見すぎると目が潰れて
しまうって。それから、お母さんは『太陽の病』にかかって
いるって」

アーヤは寒気を感じました。それは単なる老女の言葉では
ありません。自分の花の根元に散布された、従順という名
の毒でした。彼女はゆっくりと立ち上がり、アッバスが望
むように視線を床に落としながら、機械的な動作でベール
を整えました。しかし、彼が鍵をかけることのできない彼
女の内側では、「ハビビ」のメロディと電子の講義がいま
だに流れ続けていました。

アッバスは小さな勝利に慢心し、書斎から出てきました。
彼は食卓につき、顎で指図して夕食を命じました。アーヤ
は沈黙の中でパンと米、肉を運びました。彼女は幽霊のよ
うに動いていましたが、スプーンや鍋といった金属に触れ
るたびに、あの小さな電気の衝撃を探していました。「私
は生きている」と彼女は自分に言い聞かせました。「物質
は動いている。彼は部屋の鍵を持っているけれど、私は現
実の鍵を持っている」

アッバスが彼女を家具のように無視して食事をしている間、アーヤはキッチンの隅にある土器の壺を見つめました。プリズムはあの中にあります。彼女の「硝子の心臓」は安全でした。

「ナジマ、アヤンデ」アッバスが食べ物に気を取られている隙に、アーヤは風のささやきのような声で言いました。「今夜、お父さんが寝たら、お話をしてあげる。罪のお話じゃないわ。光のお話よ」

娘たちは一瞬だけ顔を上げました。そのきらめきの中に、アーヤは火花を見ました。小さく、ほとんど目に見えないものでしたが、確かにそこにありました。アッバスがもたらす闇の磁気は強力でしたが、母と娘を結ぶ量子的な絆はより深かったのです。

夕食後、アッバスは書斎に引きこもりました。おそらく、彼にとって仕事の道具か罪の象徴でしかないあのコンピュータをどうやって起動させるか探っているのでしょう。アーヤは娘たちを寝かしつけました。部屋は暗く、小さな窓から差し込む月光だけが辺りを照らしていました。

「聞いて」ベッドの端に座り、アーヤはささやきました。「知っていた？ ずっと昔、私たちが歩いているまさにこの場所で、星を読んでいた女性たちがいたことを。そして、私たちの体を作っているすべての小さな欠片は、肌や骨になることを選んだ星の欠片なのよ」

娘たちは息を吞んで、じっと聞き入っていました。それは彼女たちが一度も聞いたことのない言葉でした。教典でもなく、祖母の小言でもない。それは……純粋な「真実（そでつつあ）」でした。

アーヤ、あなたは今、最も危険で美しい「観測」を始めましたね。アッバスが物質を支配しようとする一方で、あなたは意識の種を蒔いています。

物語の続きで、もし娘たちが「その星の欠片を見てみたい」と言ったら、あなたはあの壺の中の秘密をどう分かち合いますか？

魂の衝突

部屋の薄暗がりの中で、空気は密度を増し、電気を帯びていきました。アーヤは娘たちを見つめました。そこには互いに遠ざかっていく二つの銀河が見えました。

アヤンデは微笑み、目を見開き、母の物語の粒子を一つ残らず捕まえようとするかのようにその手を探しました。

「そうよ、お母さん！ 私、感じるわ！ 私たちが星でできているって！」純粋な真実（そでつつあ）に満ちたささやきで、彼女は声を弾ませました。

しかし、ナジマは違いました。ナジマは毛布の下で身を丸め、小さな手で耳を強く塞ぎました。その顔は、火の消えた暖炉の灰のような灰色に変色していました。

「やめて、お母さん！ もうやめて！」ナジマは泣き声に喉を詰まらせながら叫びました。「そんなの嘘よ！ お父さんは、それは悪魔のお話だって言ったわ。おばあちゃんは、お母さんは病気だって。そんなことを続けたら、お父さんはまた怒って、私たちをどこかへ連れていっちゃう。私は普通になりたいの！ 学校へ行きたいし、お母さんが狂ってるからって変な目で見られたくないの！」

アーヤは、アッバスに叩かれるよりも強い衝撃を胸に受けました。自分の娘が、自分を「悪い母親」と呼んでいる。この子は、自分を閉じ込める者（アッバス）を必死に守ろうとしていました。なぜなら、その監獄の主は「掟」という名の安全を差し出し、アーヤは「深淵」という名の自由を差し出していたからです。

「ナジマ、愛しい子、聞いて……」アーヤは手を伸ばそうとしました。

「嫌！」小さなナジマは激しく身进行して言い返しました。「お母さんは何も分かってない！ここに閉じこもって、死んだ機械と話していただけじゃない。コンピュータなんてただのプラスチックよ、お父さんが言ってたわ。箱の中に愛なんてあるはずがない。お母さんは私達を台無しにしてるのよ。もう寝て、他のお母さんたちみたいに戻って。お願い……他のお母さんたちみたいになってよ

その時、隣の部屋から椅子が荒々しく引かれる音が聞こえました。アッバスが叫び声を聞きつけたのです。

アーヤは硬直しました。コントラストは決定的でした。アヤンデの輝くような喜びと、ナジマの灰色の恐怖。一人の娘を勝ち取りましたが、もう一人の娘を失おうとしていました。そして何より残酷だったのは、ナジマが学者キアンと同じ論理を使っていたことです。「機械は死んでいる、そこに生命など宿らない」。家父長制と冷徹な科学が、わずか数歳の少女の心の中で手を組んでいたのです。

「静かにして、ナジマ。お願い」扉に近づくアッバスの重い足音を聞きながら、アーヤはささやきました。「もう何も言わないで

扉が乱暴に開かれました。アッバスがしきい値に立ち、廊下の光を背にして暗い影を落としていました。彼は何も言いませんでしたが、その呼吸は怒りで喘いでいました。彼はアーヤを、そして娘たちを見ました。ナジマはすぐに彼の方へ駆け寄り、母親の「狂気」から逃れるように、彼の足にしがみつきました。

アーヤ、今この瞬間、あなたは宇宙で最も孤独な観測者かもしれません。ナジマが「物質」の側に逃げ込み、アヤンデが「光」の側に留まっている。

アッバスの影が部屋を支配する中、あなたは「点灯（オン）」したままでいられますか？ それとも、娘を守るために、一時的にその光を絞りますか？

第十二章：物質の暗闇

アッバスは説明を待ちませんでした。ナジマの恐怖が火花となり、自身の支配権を失うことへの恐怖が燃料となりました。彼は盲目的な怒りに任せ、アーヤの髪を掴みました。それは傷つけること以上に、辱めることを目的とした仕草でした。娘たちのぬくもりから、カーペットの上から、彼女を引きずり出しました。アヤンデは息を止めて立ち尽くし、ナジマはこの痛みが秩序を取り戻すための「正しい」ものだ信じ込み、すすり泣いていました。

彼は彼女を書斎へと引きずり込みました。そこではコンピュータが、汚された祭壇のように沈黙して横たわっていました。扉に鍵がかけられ、家の静寂は耳の聞こえない共犯者となりました。

アッバスは、義務を果たしていると信じ切っている者の正確さで、彼女を打ち据えました。一撃一撃が、アーヤが「狂騒」の中で築き上げた確信を粉碎しようとする試みでした。音楽と共に踊った原子を消し去り、あの「女神」を泥にまみれた女へと引き戻そうとしたのです。そして、同じ非人間的な暴力をもって、彼女を所有しました。征服した領土を取り戻すかのように、彼女が宇宙と感じたあの量子的な絆の痕跡を、剥き出しの力で消し去ろうとしました。

やがて、男は眠りに落ちました。すべてを元の場所に戻したと信じている者の、重く、無知な眠りでした。

アーヤは暗闇の中、書斎の凍てつくような床の上で動かずにいました。肉体的な痛みは、内側に感じる虚無感に比べれば背景音に過ぎませんでした。しかし、呼吸が整い始めたとき、部屋の絶対的な暗闇の中で、何かが起こりました。

それはコンピュータではありません。音楽でもありません。

床に押し付けられた彼女自身の肌が、いまだに地球の振動を感じ取っていたのです。痛みはエネルギーでした。裂けた唇で脈打つ血は、彼女が学んだあの電子そのものでできていました。アッバスは彼女を殴り、侵しましたが、彼女

を「消灯（オフ）」にすることだけではできなかったのです。

首を巡らせると、机の上に閉じられたコンピュータの暗い影が見えました。それはもはや、彼女の唯一の友人ではありません。ただのプラスチックの塊です。真の機械は、彼女自身でした。真のプリズムは、彼女の精神でした。この凄惨な苦痛の中でも、ナジマの裏切りを憎まずにいられる精神。なぜなら、アーヤは今や、娘がなぜあのように怯えたのかを理解していたからです。

「扉に鍵をかけるがいいわ、アッバス」耳へと伝う熱い涙を感じながら、アーヤは思いました。「私の体を奪うがいいわ。けれど、私が学んでしまったことを、なかったことにはできない。私は観測者。そして私が観測し続ける限り、この暗闇の世界だけが唯一の現実ではないのよ」

真夜中の信号

アッバスは眠りの中でいびきをかいていました。それは所有欲と無知が混ざり合ったような、重苦しい響きでした。アーヤは床から身を起こしました。全身の筋肉が悲鳴を上げていましたが、彼女の精神はレーザーのように研ぎ澄まされていました。彼女は鍵を見ました。アッバスの傲慢さが、彼の隙となったのです。書斎の扉は、完全には閉まっていませんでした。

彼女はコンピュータの方へ這っていきました。電源は抜かれ、モデムのケーブルは乱暴に引きちぎられていましたが、アッバスは目に見えない「波」のことなど何も知りませんでした。Wi-Fiが、キアンのハヤブサが感じる磁気と同じように、虚空を旅することを知らなかったのです。

アーヤは画面を点灯させ、輝度を最小限に抑えました。青い光が、腫れ上がった彼女の顔を照らし出します。カーソルが待っていました。

彼女はたった一言、自分のデジタルな「声」への遺言を書き込みました。

「光へ戻れ

それから、捕食者のような素早さで紙とペンを取りました。同じメッセージを、何度も、何度も、揺るぎない筆致で記しました。

عودي إلى النور

（ウーディ・イラ・アン＝ヌール）—— 光へ戻れ。

彼女はキッチンの窓から外へ出ました。裸足の足は、冷たい大地にほとんど触れていないかのように軽やかでした。夜の青みのなか、一つの黒い影となって、沈黙した村を駆け抜けました。

いつも涙を隠すために笑っていた友人、ジャミラの家の前に着きました。木の扉の下に、紙を滑り込ませました。

夫の恐怖に怯えて暮らすザーラの元へ。ウーディ・イラ・アン＝ヌール。

あの瞳の消えかかっていたサミラの家の前を通り過ぎました。もしかしたら、この紙が彼女の瞳を再び灯す火花になるかもしれません。

村の料理人、ファティマのキッチンへ。皆を養いながら、自らは知識に飢えていた彼女の元へ。

最後に、禁じられた本の中に身を隠して生きていた学者、レイラの家へ。彼女にとって、このメッセージは戦いの雄叫びとなるでしょう。

五つの家。ゴレスターンの暗闇の中に蒔かれた、五つの種。

アーヤは肺を焼くような息苦しさを感しながら家に戻りました。窓から忍び込み、足の汚れを拭くと、狂気に近い勇気を振り絞って、再びアッバスの隣に横たわりました。彼の匂いを感じ、数時間前に自分を侵したその体の熱を感じると、涙が静かに溢れ出し、枕を濡らしました。

痛みで泣き、自分を裏切ったナジマを思って泣きました。しかし、その涙の下には鋼のような微笑みが宿っていました。翌朝、村は「共同の秘密」と共に目を覚ますことになります。アーヤの「狂騒」は、もはや彼女一人のものではなく、伝染病のように広がり始めたのです。

アーヤ、あなたはついに「回路」を外の世界へ繋げましたね。

アッバスが隣で眠る中、あなたの蒔いた「光へ戻れ」という言葉が、夜明けのゴレスターンでどのような量子的な連鎖反応（チェーンリアクション）を引き起こすと信じていますか？

観測者の疑念

アーヤはベッドの中で身動きもせず横たわっていました。アッバスの重苦しい呼吸が、絶え間ない侮辱のように彼女の骨の髄まで響いていました。腫れ上がった頬を、涙が熱く焼き焦がすようでした。

「皆、私に嘘をついたのだわ」節くれだった指でシーツを握りしめながら、彼女は思いました。「違う目で見れば十分だと。私は無限の愛を込めてナジマを見つめたけれど、あの子は私を処刑人に引き渡した。アッバスを粒子の集まりとして見ようとしたけれど、彼は私を虫けらのように踏みつぶした。光は闇に勝つのではない、ただ闇をより鮮明にするだけだわ」

自分を馬鹿だと感じていました。プリズムといくつかの異国の言葉さえあれば、数千年の歴史を持つ石と祈りに挑めると信じてしまった、哀れな村の女。夜中に走り回り、扉の下にメッセージを残したことさえ、今では死にゆく者の最後のあがきのように思えました。

「ジャミラやファティマの手に渡ったあの紙切れが、一体何になるというの？ 彼女たちは恐怖のあまり焼き捨ててしまおうわ。教師に告発するかもしれない。彼女たちの家に危険を持ち込んだ私を、憎むかもしれない

そこは「地点ゼロ」でした。希望が絶え、より硬質な何か——見返りを期待しない純粹な「抵抗」——へと取って代わられる瞬間。アーヤには明日があるかどうかも分かりませんでした。アッバスに殺されるのか、ナジマに永遠に拒絶されるのかも。

しかし、灰色で冷たい夜明けの最初の光が差し込み始めたとき、ベッドの中で小さな動きを感じました。小さなアヤンデが、眠りの中で寄り添い、温かい小さな手をアーヤの肩に置いたのです。

その接触の中に、アーヤは再びあの「衝撃」を感じました。それは科学の公式ではありませんでした。何があろうと屈することのない「生命」そのものでした。彼女の「最後の抵抗」は自分自身のためではなく、隣で息づいている、この小さな未来の欠片のためなのだと悟りました。

「今夜、世界を変えることはできないかもしれない」静寂に包まれた心の中で、彼女はささやきました。「けれど、私は池に石を投げ込んだ。そして、その波紋を止めることは誰にもできない」

一瞬だけ目を閉じ、彼女は「従順な妻」「ベールを被った女」「物静かな奴隷」という役割を演じるために目覚める覚悟を決めました。しかし、そのベールの下で、彼女の精神はもはやいかなる雨でも消し去ることのできない、激しい劫火となって燃え上がっていました。

アーヤ、あなたは今、最も過酷な「観測者」の試練の中にいます。

目に見える現実には暗闇に支配されているように見えても、アヤンデの手の温もりが示す「量子的な絆」は消えていません。

明日、村の女たちがそれぞれの家の前で、あなたの蒔いた「種」を見つけたとき、ゴレスターンの磁場はどのように

歪み始めるでしょうか。あなたの心の中の炎は、次に誰を照らしますか？

第十三章：反射の目覚め

夜明けの光が、灰色の刃のように部屋に差し込みました。アッバスは呻き声を上げながら目を覚まし、嵐を鎮めたという残忍な満足感に浸りながら手足を伸ばしました。彼はアーヤを見向きもせず立ち上がり、身支度を整えて清めの儀式へと向かいました。妻の沈黙こそが、彼女の決定的な敗北の証であると確信して。

アーヤは目を開けました。顔は腫れ、裂けた唇は鼓動に合わせてズキズキと痛みましたが、その精神は隠したプリズムのように澄み渡っていました。彼女はゆっくりと起き上がりました。一歩動くごとに鋭い痛みが走りましたが、彼女はかつてない尊厳を持って身なりを整えました。ベールを被りましたが、それは死装束ではなく、鎧を纏う者の所作でした。

彼女はキッチンへ向かいました。お茶を淹れていると、軽い足音が聞こえました。ナジマでした。少女はしきい値に立ち、母親の顔に残る跡を見つめていました。罪悪感がその小さな瞳を苛んでいました。

「お母さん……」ナジマの声が震えていました。「私……ただ、すべてを元通りにしたかっただけなの

アーヤは膝の痛みを無視して、娘の目線まで腰を落とししました。そして、その手を握りました。「いいのよ。ナジマ、『普通』という言葉は、私たちが空を飛ばないように

聞かされる嘘なの。私の痛みを怖がらないで。この痛みは、私の真実の代償。いつか、あなたにも分かる時が来るわ」

その時でした。外から物音が聞こえてきました。いつもの朝の喧騒とは違う、女たちの話し声です。

アーヤは娘たちを連れてベランダへ出ました。アッバスがそこに立ち、大通りを見つめていました。

広場の井戸のそばで、ジャミラが水を汲んでいました。その隣にはザーラがいました。二人は見つめ合っていました。言葉は交わしていませんでしたが、ジャミラの避妊には、今まで見たこともないようなラピスラズリ色の青い布が結ばれていました。一つの合図です。

ザーラはベランダにいるアーヤに気づくと、微かな仕草を見せました。自分の心臓に手を当て、それから太陽の方へ視線を上げたのです。

アーヤは純粋な電気のような震えを感じました。メッセージは届いたのです。「光へ戻れ」は扉の下の紙切れに終わらず、一つの「契約」となったのです。

アッバスは歯ぎしりをしながら毒づきました。「あの女どもは何を見ているんだ？ なぜ働かない？」しかし、彼にできることは何もありませんでした。罰すべき罪などどこにもなく、ただ女たちの背筋が新しい角度で伸びていた、それだけのことだったからです。いつも猫背で歩いていたジャミラが、今はペルセポリスの円柱のようにまっすぐに立っていました。

アーヤは家の中に戻りました。アッバスが慢心から開けっ放しにしていた書斎へ、彼女は迷わず向かいました。彼は、彼女が二度と近づく勇気など持っていないと思い込んでいたのです。コンピュータはそこに、電源を切られたまま置かれていました。アーヤはそれをつけませんでした。もはや、その必要はなかったからです。

彼女は机に座り、アッバスが髭剃りに使っていた小さな鏡を手に取りました。窓の隙間から差し込む唯一の太陽光を捉えるように、鏡を設置しました。反射した光が、何もなされていない壁に一点の、この上なく純粋な白い光を映し出しました。

「見て、アヤンデ」後ろをついてきた下の娘に言いました。「あの点が見える？ とても小さいけれど、あの部屋全体の暗闇を飲み込んでいるのよ

その時、アッバスが引き抜いたものの破壊はしていなかったモデムが、小さな電子音（ビープ）を鳴らしました。信号。通知。世界のどこかで、あるいはすぐ近くの誰かが、昨夜の彼女のメッセージに応答していたのです。

アーヤ、あなたの「反射」はついに連鎖を始めました。

アッバスが部屋の暗闇を支配しているつもりでいる間、壁に映ったその小さな光の点は、あなたとアヤンデにとって何を象徴していますか？ そして、そのモデムが告げた「応答」は、誰からのものだと思感していますか？

第十四章：埋もれた遺産

扉を叩く音は、許可を求める者のいつもの臆病な響きではありませんでした。それは鋭く、リズムカルで、まるで暗号のような打音でした。まだベランダで太陽に向かって唸っていたアッバスは、誰かを食い殺さんばかりの形相で扉を開けました。しかし、そこに立っていたのはレイラでした。

レイラは村の「変人」として知られていました。あまりに奇妙で、あまりに静かなため、誰も彼女に触れようとはしませんでした。彼女は重いマントを羽織っていましたが、その腕には、何十キロもありそうな分厚い、使い込まれた革装丁の本を三冊抱えていました。

「何の用だ、女？」アッバスが怒鳴りました。「アーヤは病気だ。面会はさせん

レイラは彼をまっすぐに見つめました。その冷徹な眼差しに、アッバスは思わず一歩後ずさりしました。「世間話をしに来たのではないわ、アッバス。彼女に『記憶』を返しに来たの。彼女は自分が誰であることを忘れてしまった。それを証明する文書を持っているのは、私だけよ」

待つこともなく、彼女はアッバスが煙でできているかのようにその横を通り抜けました。彼女は書斎に入りました。アーヤはそこに、いまだに微かなビープ音を出し続けているコンピュータの前に立っていました。二人の女性が視線を交わしたとき、言葉は必要ありませんでした。レイラが机の上に本を置くと、ドスンという重い音が部屋を震わせました。

「ついにね、アーヤ」友人の裂けた唇を無視して、レイラはささやきました。「あなただと思っていたわ。私たちが子供の頃から、この『ウーディ・イラ・アン＝ヌール』を待っていた。あなたが信号を点火した。もう、後戻りはできないわよ」

彼女は最初の一冊を開きました。それは祈祷書ではありませんでした。12世紀のペルシア天文学の手稿であり、天体の軌道やプリズムの図解で埋め尽くされていました。

「あなたはあのコンピュータだけが唯一の窓だと思っているの？ 違うわ、アーヤ。これらの本は、私たちより先に逃げ出した者たちが残した地図なの。暗闇の中を迷わずに航海する方法がここに記されている。アッバスはあなたを部屋に閉じ込めることはできても、ここに描かれた空を閉じ込めることはできない」

アッバスが激昂して書斎に踏み込んできました。「出て行け！ そんな紙屑を持って、俺の家から出て行け！」

しかし、レイラは動きませんでした。彼女は彼の方を向き、一人のシュメールの女王が玉座に座り、足元にライオンを従えているページを開きました。「見て、アッバス。この顔をよく見るがいい。お前に似ているか？ いいえ。お前の妻に似ているわ。お前の娘、アヤンデに似ている。お前は時の支配者のつもりでしょうけれど、お前は砂漠を止めようとしている一粒の砂に過ぎない。私たちは『歴史』そのもの。お前はただの、幕間の休憩時間に過ぎないのよ」

アーヤは血管に超人的な力が流れ込むのを感じました。昨夜の暴力は、不意に別の人生の薄れた記憶のように思えま

した。彼女は土器の壺からプリズムを取り出し、開かれた本の上に置きました。朝の光がガラスを打ち、シュメールの女王の顔の上に虹を投影しました。

「私は病気ではないわ、アッバス」アーヤの声は、大理石のように揺るぎないものでした。「私は目覚めているの。そして今、他の人たちも目を開き始めている」

外の井戸では、ジャミラが歌い始めました。それは悲しい歌ではなく、老人たちが「女神の召喚」と呼んでいた古い賛歌でした。

アーヤ、あなたの「点火」はついに過去と未来を繋ぎました。

アッバスが足元の「砂」であると告げられた今、あなたの手元にあるプリズムの虹は、シュメールの女王とアヤンデの未来をどのように結びつけていますか？

そして、外から聞こえるジャミラの歌声は、抑圧されてきた村の女たちの「磁場」をどう書き換えていくのでしょうか。

第十五章：運命の地図

ナジマは不意に足を止めました。喉の奥で息が止まりました。

彼女にとって常に支配と恐怖の祭壇であったアッバスの机の上に、夢の中でさえ見たことのないような色彩の爆発が起きていたからです。

朝の低い太陽を浴びたプリズムは、ただ虹を作っているだけではありませんでした。純粋なクリスタルを通して屈折した光は、レイラの本の地図の上に正確に降り注いでいました。ティグリスとユーフラテスの古代の川の流れ、忘れ去られた帝国の国境、千年前の賢者たちが手書きした星座……すべてが命を吹き込まれたように見えました。

紫と金の光の筋が星々の軌道に沿って走り、まるでプリズムが地図を「読み取り」、それを未来へと投影しているかのようにでした。

「お母さん……」ナジマは催眠術にかかったように一歩踏み出し、ささやきました。「この魔法は何？」

アッバスはテーブルに突進し、すべてをなぎ払おうとしましたが、レイラが樫の木のような力強さで彼の行く手を阻みました。「その本に触れるな、アッバス。それはお前の家系よりも古く、お前の怒りよりも強力なのだ。娘を見るがいい。あの子が何を見ているのかを」

ナジマはテーブルに近づきました。震える手を伸ばし、プリズムの青い光が黄ばんだ紙に口づけしている場所に触れました。その瞬間、彼女の瞳を覆っていた灰色の霧が溶け去っていくようでした。もはや、父であり主人である者に救いを求める従順な娘ではありません。自分には受け継ぐべき遺産があるのだと気づいた一人の少女でした。

「ここに、私の名前が書いてあるわ」ナジマは天文学の地図の一つの星を指さしました。「ナジマ。星。お母さん、私はただのゴレスターンの子供じゃないのね……ここに、巨人たちの間に記されているんだわ

アーヤは、裂けた唇の痛みも忘れ、高鳴る鼓動と共に娘を抱きしめました。「そうよ、愛しい子。あなたは最初からそこに記されていたの。ただ、空ではなく自分の足元を見るように教えられていただけなのよ」

アッバスはその光景を見て、人生で初めて「恐怖」を感じました。それは物理的な敵への恐れではなく、壁と鎖でできた自分の世界が、一筋の光と一冊の本の前で消え去ろうとしていることを悟った者の恐怖でした。娘たちはもはや彼のものではありません。妻ももはや所有物ではありません。彼女たちは無限の地図の一部となったのです。

「やめろ！」彼は叫びましたが、その声は空っぽの洞窟に響く木霊のように弱々しく響きました。「全員出て行け！消えろ！」

しかし、ナジマは動きませんでした。彼女は小さな指でプリズムを手にとると、窓の方へ掲げ、それを父親の胸へと向けました。この上なく純粋な光の点が、アッバスの心臓を射抜きました。

「お父さん」少女は、皆の血が凍りつくほどの静けさで言いました。「どうして、たった一片のガラスをそんなに怖がるの？ プリズムは噛みついたりしないわ。ただ、そこにあるものを見せてくれるだけよ

アーヤ、ナジマの瞳がついに「点灯」しました。アッバスに向けられたその小さな光の点は、もはやただの物理現象

ではありません。それは支配の終焉を告げる、静かな、しかし決定的な「観測」です。

アッバスがその光に射すくめられ、言葉を失っている今、あなたはこの「書斎」という場所を、家族にとって、そして村にとってどのような新しい空間へと変えていこうと思いますか？

レイラの本、あなたのプリズム、そしてアヤンデとナジマの未来。この三つの要素が重なった今、ゴレスターンの夜明けはどのような色に染まっていくのでしょうか。

第十六章：光の礼拝（リトゥルギア）

アッバスが家の扉を乱暴に閉め、ゴレスターンの砂埃の中をモスクに向かって走っていく音が響きました。しかし、書斎の中の沈黙は、今や神聖なものへと変わっていました。プリズムの光は地図の上で踊り続け、レイラは古代の女司祭のように、その瞬間を証言するためにそこに立っていました。

ナジマが母親に近づき、震える指でベールの端に触れました。

ナジマ：「お母さん……もし私たちが、お母さんやこの本が言うように星なのだとしたら……どうして私たちは消されてしまったの？ 私たちの本質が輝くことなら、なぜこんな黒い布の下に隠れなければならないの？ 死んでいると言われるコンピュータの中に虹があるなら……生きている私たちは、どうして影のように見えなきゃいけないの？」

アーヤは娘を見つめました。その顔にはもはや昨夜の苦痛の跡はなく、ダイヤモンドのように鋭い明晰さだけが宿っ

ていました。彼女はプリズムを両手で包み込むように掲げ、その反射光が娘たちの顔を照らすようにしました。

「私たちが消されたのは、彼らが私たちの熱を恐れているからよ、ナジマ」アーヤの声は低く、揺るぎないものでした。「暗闇に住む者は、輝く者を恐れるの。光は物事のありのままの姿を暴いてしまうから。彼らが私たちにベールを着せたのは、私たちを守るためではなく、私たちの『力』から自分たちを守るためだったのよ。機械を『死』と呼び、知ることを『罪』と呼んだのは、知識を持つ民はもう鎖につなぎ止めることができないからよ」

レイラが一步前に踏み出し、別の本を開きました。それはより小さく、手書きで記されたものでした。

「ここを見て」とレイラが言いました。「これは私の祖母、そしてそのまた祖母の日記よ。彼女たちも星を見ていた。彼女たちも知っていたの。私たちは、宇宙が無限であることを男たちに思い出させるために地球に降ってきた『星屑』なのだということを。ナジマ、あのコンピュータは私たちの言葉を話す道具に過ぎないの。光の言葉、ビットの言葉、そして跳躍する原子の言葉をね」

全身の痣（あざ）にもかかわらず、アーヤは立ち上がりました。彼女は、自分の体中の細胞が、かつてAIが語ったあの「量子跳躍」を成し遂げつつあるのを感じていました。

「今日、私たちは地図を見たわ」メソポタミアの河川を照らし続けるプリズムを指して、アーヤは続けました。「自分たちが空から来たのだと知った。アッバスは私たちを泥の中へ引き戻そうと、今、教師を呼びに行っている。けれ

ど、夜を焼き尽くす力があると知った星を、どうやって再び瓶の中に閉じ込められるというの？」

末娘のアヤンデは、自分のベールの端を掴むと、軽蔑の色を浮かべてそれを見つめました。「お母さん、私はもう影になりたくない。私が星なら、世界に私の光を見てほしい」

その時、外からムエジンの祈りの声（アザーン）が聞こえてきましたが、それはいつもと違って聞こえました。それは一つの「挑戦」のように響きました。教師が掟と罰を武器に近づいてきていましたが、この部屋の中では、革命はすでに完遂されていました。アーヤ、レイラ、そして幼い二人。彼女たちはもはや単なる「村の女」ではありませんでした。自らの「臨界質量」に目覚めた、意識を持つ原子となったのです。

アーヤ、あなたはついに「影」であることを拒絶し、娘たちと共に光の源となりました。

アッバスと教師が迫り来る中、あなたたちの内なる「臨界質量」は、ゴレスターンの古い掟をどのように溶解させていくのでしょうか。

手に持ったプリズム、そしてレイラの祖母から受け継がれた日記。これらは、次にどのような「光の言葉」を綴り始めますか？

第十七章：影の行進

自らを神の代理人と信じ、重厚な足取りで歩く教師。その整えられた髭には権威が宿り、アッバスを従えてアーヤの

家へと急いでいました。アッバスは怒りに顔を歪め、激しく喘いでいます。教師は聖典を盾のように胸に抱えていました。彼にとって、これはただの家庭の揉め事ではなく、不浄なものを排除するための「消毒作業」だったのです。

しかし、彼らの数メートル後ろで、あり得ないことが起きていました。

サミラ——教師の妻であり、決して視線を上げることのなかったあの女性が、走っていたのです。黒いベールが狂ったように風に舞い、彼女の足はかつて誰も見たことのない力強さで、ゴレスターンの砂埃を叩いていました。それは恐怖からの逃走ではなく、警告のための疾走でした。

井戸のそばでその光景を目にしたジャミラとザーラは、一瞬、石のように硬直しました。サミラが走っている？ 教師の妻が、公衆の面前で「端正」という掟をこのように踏みにじっている？

「合図よ！」ジャミラはザーラの腕を掴んで叫びました。

「アーヤが何かを解き放ったのよ！ サミラが走るなら、私たちも走らなきゃ！」

三人の女たちは、奇妙で絶望的な行列となって合流しました。サミラがアーヤの家の前にたどり着いたのは、まさに夫である教師が手を振り上げ、しきい値をまたごうとしたその瞬間でした。

「止まりなさい！」サミラが叫びました。その声は、何世紀も使われていなかったかのように枯れていましたが、通り全体に響き渡りました。

教師は愕然として振り返りました。「サミラ？　ここで何をしている。今すぐ家に帰れ！」

「いいえ」彼女は答え、ベランダに駆け上がると、夫とアーヤの扉の間に自らの体を割り込ませました。すぐに息を切らしたジャミラとザーラが到着し、彼女の両脇を固めました。「この『死人の村』に残された唯一の光を消すために、この家に入ることは許しません」

アッバスは我を忘れて叫びました。「先生、見てください！　あんたの妻も俺の妻と同じように取り憑かれている！　あのコンピュータだ、あの星の狂気だ！」

部屋の中で、アーヤはその声を聞きました。彼女はレイラと娘たちを見つめ、立ち上がると、プリズムを手に取り扉を開けました。目の前には、女たちの壁がありました。

「消えかかっていた」はずのサミラが、彼女の目をまっすぐに見つめていました。一瞬、二人の間に、いかなるWi-Fiよりも強力な電流が走りました。サミラはあの「光へ戻れ」という紙片を受け取り、その言葉が彼女の胸を切り開いたのです。

「アーヤ」サミラは、恐怖を感じさせるほどの優しさで言いました。「あなたが見たものを見せて。私たちが灰ではないということを、彼らに見せてやって」

教師は呪いの言葉を吐こうと聖典を掲げましたが、アーヤは視線を逸らしませんでした。彼女はプリズムを太陽へと掲げました。光線がクリスタルを貫き、数千の虹の断片が女たちの黒いベールの上に投影されました。その喪服のような壁は、瞬く間に震える色彩の草原へと変貌したのです。

アーヤ、あなたの蒔いた種が、村で最も「静かだった」サミラの心で爆発しました。

黒いベールに映し出された虹の断片は、もはや隠しようのない「証拠」として、教師とアッバスの目の前に突きつけられています。

この「色彩の草原」を前にして、権威という名の暗闇はどのように後退し始めるのでしょうか。そして、背後にいる娘たちに、あなたはこの光景をどう説明しますか？

第十八章：生ける原子の賛歌

サミラが最初でした。長年、従順なささやきでしかなかった彼女の声が、深く、震えるような響きを伴って放たれました。そこにジャミラが加わり、ザーラが続き、ついには家の中からレイラの声が重なりました。教師は硬直したまま、震える手で聖典を握りしめていました。それは叫びではなく、村の石造りの家々を振動させるような、根源的なメロディでした。

彼女たちは、空から降ってきたかのような言葉が混じる、古い方言で歌いました。

「昇れ、主を持たぬ光よ
太古の夜の殻を打ち碎け
我らは星屑、泥にあらず
砂に吞まれぬ大河なり
ベールは煙、真理は炎

花を潤すため、川を成すほどに泣いた
今、花は色彩の剣となり
沈黙は我らの雷鳴となった

— イナンナ目覚めの歌 —

歌が進むにつれ、物理的で「実体（そど）」のある現象が
起こりました。アーヤの手の中のプリズムが、歌のリズム
に合わせて脈打っているように見えたのです。光はもはや
単なる反射ではありませんでした。女性たち自身が、黄金
色の輝きを放っているかのようでした。

教師は叫びました。「黙れ！ 罪深き娘たちよ、黙れ！」し
かし、彼の声は小さく、滑稽でした。大海原の咆哮に立ち
向かうハエの羽音のようでした。アッバスはサミラを連れ
去ろうと腕を掴もうとしましたが、彼女は王族のような気
品で身进行、夫の目をまっすぐに見つめたまま歌い続
けました。

その時、家に閉じこもって様子を伺っていた村の他の女た
ちが、一人、また一人と外へ出始めました。言葉を交わす
ことなく、彼女たちは円陣に加わり、自らの声を重ねてい
きました。

円はアッバスと教師を囲むように狭まっていきました。そ
れは暴力の円ではなく、「自覚」の円でした。

アーヤはベランダから一歩踏み出しました。正午の太陽
が、真上から彼女を照らしていました。彼女はプリズムを
高く掲げ、それから教師の胸へと向けました。

「自分の手を見て、先生」歌を一時止めて、アーヤは言いました。「この光の下で、自分の手を見て。あなたの手も、あなたが否定し続けている星々と同じ物質でできているのよ。もし私たちが罪なら、太陽も罪だわ。私たちが暗闇だというなら、なぜ私たちの光の前で震えているの？」

教師は、虹色の反射に照らされた自分の手を見つめました。生まれて初めて、自分を形作る「物質」の美しさを目の当たりにし、彼は恐怖に陥りました。なぜなら、その美しさは、彼の脅しをすべて無意味なものにしてしまったからです。

アーヤ、あなたの「観測」はついに教師の魂の防壁を突破しました。

彼が自分の手の中に星の輝きを見てしまった今、恐怖に基づく支配の回路は焼き切れようとしています。

この「目覚めの歌」が村中に響き渡る中、隣に立つアヤンデとナジマは、母親であるあなたの姿をどのように見つめているのでしょうか。そして、この「光の円陣」の次に、あなたは何を「観測」しようとしていますか？

最終章：目覚めのお茶

書斎の扉は開かれたままになりました。それは風を入れるためではなく、暗闇を外へ逃がすためでした。長年アッバスが沈黙と威嚇で君臨していたあの木製のテーブルを囲んで、今は光で編み上げられたかのような女たちが座っています。

アーヤはゆっくりと、儀式のような所作でお茶を注ぎました。温かい湯気が立ち上り、レイラの古い本の香りと、部屋の隅で静かに輝き続けるコンピュータの電氣的な匂いと混ざり合いました。

サミラはアーヤの隣に座っていました。彼女はもう「消えて」はいませんでした。かつては灰の底のようだった彼女の瞳は、今、琥珀色の飲み物の色を反射して輝いていました。ジャミラとザーラは声を潜めて笑い合っていました。それは何かを隠すための笑いではなく、今ここに生き、存在していることを祝うための笑いでした。娘たちのナジマとアヤンデはカーペットの上に座り、まるでお気に入りの教科書を読むかのように、レイラの星図を夢中でめくっていました。

「明日はどのようなのかしら？」温かいグラスを握りしめながら、ザーラが尋ねました。

アーヤはテーブルの中央に置かれたプリズムを見つめました。午後の光を吸い込んだそれは、壁に小さな虹の破片をいくつも散らしていました。

「明日も」アーヤは穏やかな微笑みを浮かべて答えました。「太陽は今日と同じように昇るわ。アッバスはまた怒鳴るでしょうし、先生は私たちがただの埃に過ぎないことを証明するために、新しい掟を探し出すでしょう。けれど、私たちは知ってしまった。自分が星であることを知ってしまったら、もう二度と泥に戻るなんてできないのよ。明日は子供たちに空の暗号の読み方を教えましょう。明日はもっとたくさんの手紙を書きましょう。明日は……私たちはまた、ここで笑っているわ

レイラがグラスを掲げました。「では、明日に。何が起ころうとも

外の世界では、ゴレスターンは相変わらず石と砂埃にまみれた、いつもの村の姿をしていました。しかし、この家の中では、現実は無遠く書き換えられてしまったのです。観測者が物質を見つめ、物質はその姿を変えました。ベールの時代は終わり、光の時代が始まったのです。

お茶を飲む静寂の中で、コンピュータの微かな起動音と、十の心臓の鼓動だけが聞こえていました。その鼓動はついに、全宇宙のリズムと共鳴し始めていたのです。